

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【タイトル】

どろろの英霊のギョロ目の宝具と百貌のスキルを持って魔法少女の世界に飛ばされました

## 【作者名】

鎌融

## 【あらすじ】

よくあるテンプレの如く死んじゃった一人の若者が神様に転生させてもらう話です。

ただし転生の際に渡された特典が問題で……

\*今作は

作者の突然な思い付き

第一期、第二期なんぞキングダムゾン!!

卑怯? 汚い? 勝てばよかろうなのだ!!

綺麗なス力さん

の提供でお送りします

## 第1話

「始めまして×××? 君には転生してもらおうと思いま〜す」

車に引かれて死んだと思ったたらよくわからない白い部屋にいた。何を言っただかry。どうやら俺は二次創作の小説でよくある転生の場面に出くわしたらしい。目の前にいるのはへらへらと笑っている一人の男性、人によってはこの態度に苛立ちを覚えるかもしれないが俺個人としては親しみが持てる。

「先生、質問いいですか？」

「んん〜? なんだい×××?」

「どこに転生するかわかりますか？」

「ちよいまち・・・どうやらリリカルなのは世界みたいだな」

「・・・マジっすか？」

「おおマジです」

やべえやべえやべえやべえやべえよ!!俺第一期しか知らないけど主人公がお話と称して砲撃ブッパするような世界じゃないか!!そんなところに行ったら即デスる自信満々だよ!!

「心配しなくても能力は幾つかプレゼントするから。んじゃ、ここから一枚引いて」

「ほいね・・・f a t e?」

「なるほどf a t eね〜、なら今度はこっちから三枚引いて」

最初に引いた紙は多分貰える能力の世界の指定みたいな物だろう。つまり俺はf a t eの世界の能力を貰えるわけか。f a t eならば

狙うは【王の財宝】か【UNLIMITEDBLADEWORKS】、  
もしくは【十二の試練】!!

「おおおおい!!」

「気合いの入った引きをありがとうえつと一枚目は…….zer  
のキャスターの宝具」

「え?」

「二枚目は…….百貌のアサシンの気配遮断」

「ひよ?」

「三枚目は…….英雄王の慢心」

…….ファ!?イヤイヤヤ!!ちよつと待って下さいよ!!キャ  
スターの宝具は問題があるけどまだ許せる!!アサシンの気配遮断は  
便利(確信)!!ただし慢心、テメーは駄目だ!!なんだよ慢心って!!海  
魔殺られてブチ切れるってか!?気配遮断バレて怒れってか!?あれが  
許されるのは英雄王だからであってこんな一般市民には荷が重すぎ  
ます!!

「え、英雄王の慢心って…….」

「ちよつと待って下さいよおおおおお!!!慢心は無いでしょう  
よおおおおおお!!お願いだから変えて下さい  
よおおおおおお!!!」

「うん、流石にこれは酷いから一度だけ引き直させてあげるわ」

「ありがとうございませす!!それでは」

せめて!!せめて!!まともなヤツ来てくれ!!そう願いながら引いた  
紙に書かれていたのは…….

「…….アルターエゴ【メルトリリス】?」

「ファ!?

え？これってメルトリリスくれるってことなの？それともメルトリリスのステータスになるってことなの？はたまた俺がメルトリリスになるってことなの？

「ああ・・・うんまあ・・・俺がいい具合に調整してやるから、お前は行ってこい」

「へ？」

男性に肩をつかまれてそのまま下へと押し込められる。普通なら床に体を押し付けるような形になるはずなのだがなんと俺の体は物理法則を無視してそのまま床に沈んでいった。

出産シーンかと思った？残念キングクリームゾーンでした

『マスター、起きなさい。マスター』

声をかけられて意識が浮上する。目の前にあるのはこの警備であるう無人の戦闘機の残骸、戦闘の影響か廊下につけられていた電灯が不規則にフラッシュしていて目に悪そうだ。

「あゝ・・・リリースどのくらい落ちてた？」

『ざっと三十秒ってところね。戦闘機の爆発で壁にぶつかって頭を打ったのだけど覚えてるかしら？』

「覚えてないけど頭がいてえ。でも動く分には問題なさそう」

『そう、なら早く私を起動させなさい。気絶したから解除されているわ』

「了解、メルトリリスセットアップ」

服についた埃を払いながら立ち上がり自身のデバイスであるメルトリリスを起動させる。服の上から黒いロングコートが現れ、さらに足には鋭く尖ったスパイク付きの靴が装着されるどうやらあの男性から貰ったメルトリリスはデバイスになったようだ。

「敵の増援は？」

『今のところは探知してないわ。さっき倒したので尽きたのか、あるいは』

「研究員が全員逃げ出したってところかね？あーメンドイ、絶対上からいちゃもんつけられるわ」

俺が転生を果たしてから早十七年、現在俺は時空管理局という組織で喝托魔導師という肩書きで働いている。喝托魔導師というのはいわゆるバイト扱いと同じ。正式に属してはいないが賃金が他の仕事に比べて高いという理由でこの役職についている。カッソカッソとスパイクと床がぶつかる音をたてながら研究所の奥に進む。俺が受けた仕事の内容は違法な研究をしている研究所の調査兼制圧というどう見ても一人でやらせるにはおかしい物だ。魔導師の数が少ないのは分かるがせめて二、三人は廻してほしかった。

「お役所勤めも大変ですだよ〜と、ここが研究室かな？」

『でもロックがかけられているみたいね。コンソールは・・・大丈夫、生きてる。マスター』

「ほいさあ」

壁にあったコンソールにメルトリリスのスパイクを突き刺す。するとスパイクはコンソールを砕くのではなく、水に指を入れるがごとく抵抗なく沈んでいった。そしてここからメルトリリスの本領発揮である。

『・・・プログラム掌握完了。設備の割りには 安いまずい プログラムの構成だったわね』

「どんなプログラムだろうが即座に分解、吸収、理解するプログラムウイルス【メルトリリス】の前には無力だろつね」

『それでも歯応えがあるプログラムを食べてみたいものなのよ。少しは期待していたのにガッカリだわ』

「リリースが満足するようなプログラムがあるのかね？それでは御開帳つと」

メルトリリスを引き抜いてコンソールを操作し研究室の扉を開ける。質量兵器の研究でもしているのかと思いきや開けてみたが中は予想以上に悪趣味な物だった。所狭しと並べられた培養器の中には手足

の無い人間、皮が無く筋肉がむき出しになっている人間、逆に筋肉が無く内臓だけになっている肉塊が浮かんでいた。

『これは・・・人体実験かしら？』

「いや・・・多分プロジェクトFだな」

プロジェクトF、それは人工的に高性能な魔導師を作り出す目的で行われているプロジェクト。元々は大魔導師を名乗る某さんが娘の蘇生のために始めた研究だったと聞いている。しかし今では過程で得た副産物の方が目的になってしまっている。大魔導師さんは浮かばれないねえ。

「うえ・・・こんなもののデータ取らないいけないなんて誰得だよ」

『文句言わない、これがご飯の源になるのよ』

「こんな光景見ながら飯の話なんてするなよ、食欲が失せるわ。ところでリリースで写真とかデータ取り込んでるけど大丈夫か？」

『管理局にデータ渡したら速攻で削除するわ』

「つまり被害を受けるのは俺だけか・・・っ!!」

これでトラウマを負ったら管理局訴えようかななんて考えながら進んでいくと奥の方に別の扉を見つけた。

『マスター』

「はいよっし」

コンソールにメルトリリスをぶっ刺し扉を開ける。するとその部屋の培養器の中に二人の少女が浮かんでいた。しかも前の部屋にあったような不完全な実験体ではなく四肢の欠損すらない完璧な状態で、だ。年は小学生高学年くらいだろうか。金髪の髪と水色の髪が培養液でユラユラと漂っている。金髪の髪と水色の髪は無いが水色の髪の少女の方には見覚えがあった。



「・・・フェイト・テストロッサ？」

『フェイト・テストロッサっていったらハラオウン家の養子に入ったあの？』

「ああ、擦れ違った程度しか見てないが間違いない」

そう、水色の髪の少女はフェイト・テストロッサに瓜二つな容姿をしているのだ。何か情報は無いか。そう思って探してみるとあっさりと目的の書類を見つけてしまった。

「プロジェクトR？」

『何、そのプロジェクトFの二番煎じみたいな名前？ 発案者のネーミングセンスの無さが伺えるわね』

「名前があれだけでも中身は最悪だな。プロジェクトRのRは

蘇<sup>Rebirth</sup>生、つまり死んだヤツを生き返らせることが目的みたいだな」

『死者の蘇生ってやつね』

「プロジェクトFで強化された素体を作り上げてそこから記憶の模写・・・これを考えたヤツは馬鹿で天才だな」

プロジェクトRの概要を流し見てから終わりの部分で二人のプロファイルがあることに気づいた。金髪の髪の少女はユーリ、過去に管理外世界において起きた【マテリアル事件】の主謀格にして盟主であるユーリ、彼女の創造の成功と共にマテリアルの一角であるレイ・ザ・スラッシャーの創造に成功したともあった。他にも二体のマテリアルがいるようだが創造は難航しているとの記述もある。

「・・・リリス、マテリアル事件って知ってるか？」

『・・・少なくとも私のメモリーに該当するデータは無いわね』

やべえよこれ、間違いなく踏み込んだじゃない部分じゃないか!!  
リリスには毎日とまではいかないが出来るだけデータを更新するよ

うに頼んである。それなのにそのリリースが知らないと言うことは管理局が意図的に削除されている事件、つまりは管理局の闇ともいえる部分だ。こんなのに関わったとバレれば一介の魔導師である俺は間違いなく消されるだろう。

『一番の選択肢は見なかったことにして彼女たちを殺すことね』  
『でもなあ・・・』

そう、彼女たちはクローンと言う存在であっても間違いなくこの場で生きているのだ。敵対しているヤツを殺すならなんら問題はないが敵意の無いヤツを殺すのはどうしても躊躇いが生まれてしまう。

『マスター』

リリースの急かす声が聞こえる。わかってる、俺だって死にたくない。だからこれが一番の選択肢だってわかってる。蹴りの体制に入る。せめて痛みを感じる間も無く一瞬のうちで。それなのに、金髪の少女と水色の髪の少女と目があってしまった。どうしてこのタイミングで目覚めたのか俺は知らない。でもその目を見てしまった。

「……………生きたいと語っている目を見てしまった。

「ああ、糞が」

それを見てしまった俺は齒軋りをしながら蹴りを放った。

## 特大の爆弾を抱えてしまった

研究所を後にした俺はその研究所と同じ第68管理世界にあるペンションで今回の調査に関する報告書を書いていた。書く内容は研究所の規模、無人の戦闘機、そして研究していた内容について。プロジェクトFに関する研究をしていたとの記述を添えながらもプロジェクトRに関することは一切書かない。そして研究所のプログラムをいじってすべての実験体を死滅させたことを締め書いて管理局支部に報告書を提出した。書き終わると同時にため息をつく腹部「……胃の辺りが少し痛んだ気がした。」

『バカ』

「ああそうですよ、あたくしゃバカでございますよ」

『バカ』

「ああハイハイ」

メルトリリスから放たれるバカ発言に俺は生返事ではか返すことができない。その理由はベットの所で寝ている二人の少女だ。聡い者ならわかるだろうが俺はプロジェクトRの完成体たちを助けてしまったのだ。管理局最大の爆弾を抱えてしまったことで俺の胃がマッハでヤバイ。

『バカ、貴方は自分が何をしたかわかってるの？』

「人助け、ついでに自分の首をギロチンにセットするはめになりました」

『このお人好し』

「返す言葉もございませんよ」と

『どうにいくつもり？』

「食料と酒とヤニを買いに。やけ食いしてやけ酒してカートン空けで  
もしないとやっつてられんわ」

『・・・私のマスターはどうしようもないお人好しだけど』

「ん？」

『貴方のそういつとこ、私は好きだわ』

「・・・どうも」

「ここでツンデレ乙とか言って茶化してしまえばリリースは高確率で  
しばらくの間セットアップをしてくれなくなるのは過去の経験から  
明らかなので軽くお礼を言っただけに止めておいた。

食料と酒とヤニを買い込んでペンションに戻り、テーブルの上に荷  
物を置いて寝室に向かう。二人はまだ眠っているようだった。誤解  
のないように言っておくが服は研究所にあった物を着せてある。そ  
の際にまあひと悶着あった訳だが・・・ロリコンじゃ無いからセーフ  
だよな？小腹が空いたので買ってきたビーフジャーキーをかじって  
いると金髪の少女が目を覚ました。

「ん、起きたか」

「あ、貴方は・・・」

「体調は大丈夫か？」

「はい、少しぼろっとしますけどそれ以外は大丈夫です」

少女の返答に良かったと安堵しながら買っておいたリンゴをすりおろして少女に差し出す。固形物が食べられるかわからないから病人に与えるような食事をチョイスしてみた。戸惑いながらも少女は皿を受け取るとこのタイミングでもう一人の水色の髪の少女が目覚ました。キョロキョロと辺りを見渡し、俺を視界に捉えると素早い動きで金髪の少女の前に立つ。

「ユーリ大丈夫!? 覚悟しろへんしつしやめ!! この僕、レヴィ・ザ・スラッシュャーが相手だ!! 僕は強いんだぞ!! 凄いなんだぞ!! カッコいいんだぞ!!」

「あ、あの・・・レヴィ」

「どうしたのユーリ?」

「この人が・・・私たちを助けてくれた人です」

「・・・」

「・・・」

嫌な沈黙が寝室を包む。しばらくして何か決意を決めたような表情をしたレヴィは威嚇の体制を辞めて俺に向かって頭を下げた。

「ごめんなさい!!」

「許す!!」

「えっ?」

「いきなりこんな場所で目を覚ましたら混乱もするわな。ところでレヴィだっけ? 体調は大丈夫か?」

「僕は大丈夫だけど」

「そうか、良かった良かった」

二人とも体調が大丈夫そうなことに安堵しながら買っておいた子供用の服を差し出して着替えるように言い、俺は一人リビングに戻っていった。

リビングにあるソファーに着替えた二人と向かい合って座る。二人に  
対面する形で俺が座り、テーブルの上には待機形態になっている  
メルトリリスをおいてある。こうすることでこちらには敵意がない  
ことをアピールしているわけだ。

「ん、まずはお互いに自己紹介といこうか。俺はネリアル・ミッド。親  
しいヤツはネルとか呼んだりしている。好きに呼んでくれ」

「僕は多分力のマテリアルのレヴィ・ザ・スラッシャーだよ！」

「私はユーリ・・・だと思えます」

「多分、だと思っね・・・記憶はハッキリしてないのか？」

「ハッキリしてるから多分なんだよ」

「私たちには元々のマテリアルとしての記憶はしっかりと模写されて  
います。でも私たちはそのマテリアルのクローンです」

「だから断定できないと・・・面倒さね」

オリジナルの記憶を模写するのはわかるがどうして自身がクロー  
ンであることも教えているんだ？クローンのことを教えなかった方  
が都合が良さそうなの。

「それで・・・私たちをどうするつもりですか？」

「ん？どーもしないよ？ただ助けたかったから助けただけだし  
ね・・・うわーこれからどうしよう何も考えなしに助けたから  
なー絶対これ厄介事のオンパレードにしかならねえよ」

今ごろになってまた自己嫌悪の嵐。レヴィとユーリが見ている目  
の前でソファーに顔を埋めてブツブツと独り言を撒き散らす。

「だ、大丈夫ですか？」

『いいのよ自業自得なんだから。私は彼のデバイスのメルトリリスよ。リリースでいいわ』

「よろしくねー!!」

「よ、宜しく願います」

「あーもう!!レヴィ!!ユーリ!!お前らにある選択肢は三つだ!!」

ソファーから顔を上げて自棄になりながら叫ぶと二人はビクッと反応したけど今の俺には関係ない、むしろ気にはいけないと思う。

「ひとつ!元々いた研究所の職員に保護される!!これはあんまりお勧めしない!!ふたつ!!この世界で暮らす!!そうするなら住民票とかは俺が工面してやる!!そしてみつ!!俺に着いてくる!!さあどうする!!」

「作戦タイム!!」

「許す!!」

レヴィの作戦タイム発言を許すと二人はこそこそと部屋の隅にまで移動した。

「ねえねえ、ユーリビシするっ」

私の記憶が確かであるなら力のマテリアルと呼ばれていた少女レヴィが話しかけてくる。私のオリジナルは人見知りな性格な為か初対面であるネリアルと話すときはどうしても動揺してしまうが彼女と話す分には問題はない。

「どうするもなにも、私たちには三つ目の選択肢しかないですよ」

「どうして?」

「まず一つ目の提案は論外、レヴィはあそこへ戻りたいですか?」

「嫌だ!!」

「そして二つ目のはこれもまた困難です。住民票を工面すると言ってきましたが私たちの外見はまだ子供です。金銭面についてどうしても支障が出てしまいますし研究所から追っ手がくればどうしようもありません」

「え?なんで?そんなの僕がぱぱっとやっつけちゃえばいいじゃん」

「忘れたんですか?レヴィには今デバイスが無いのですよ」

そう、マテリアルとしての戦力を十分に発揮するためのデバイスがこの場には無いのが痛い。研究所にはあったかもしれないが今となってはどうしようもないこと。私のオリジナルはデバイス無しで一人でも殲滅戦を行える程の戦力を有していたと記憶にはあるが私にはオリジナルが持っていた永久結晶と呼ばれるロストロギアが無い。どうやら研究所でも永久結晶を再現ことは出来なかったらしく代わりのロストロギアが埋め込まれているがそれがあるから全力で戦えるという訳ではない。

「私も今の状態じゃ長期の戦闘は不可能です」

「・・・もしかして所謂詰んでるってやつ?」

「もしかしなくてもそうですよ」

「だったらネルに助けてもらえばいいじゃん」

「それは・・・そうですけど・・・」



確かに彼自身が提出した選択肢にも彼を頼るといふのはある。実際研究所から私たちを助けてくれたのだ、助けてくれと言ったら彼は間違いなく助けてくれるだろう。しかしそれは彼を危険に巻き込むことを意味している。

「ユーリはさ、深く考えすぎだと思っよう？」

「レヴィ？」

「多分だけどネルは危険だっていうことをわかってああ言ってると思っよう。だからキチンと頼めばわかってくれるよ」

「ああレヴィ!!」

そう言っってレヴィは私の手を引きながら彼の元に向かっっていった。この行動力は羨ましいと思っうがもう少し考えて欲しいと思っう。

なんか意気揚々としてるレヴィがユーリを引きずっって戻っってきた。にしてもレヴィはフェイト・テストロツサとは性格が違っうな、あっちは物静かな感じだっただけどこっちは元気っ子っって感じだし。

「考へはまとまっったか？」

「うん!!ネル、僕は厄介事の塊だよ!!」

「わかってる」

「僕は戦っうことしか出来ないしユーリは引っ込み思案だし!!」

「うんうん」

「そんなデメリットだらけだけどネルに着いていきたい!!」

「それはお前たちがどういう存在なのかわかって言ってることなのか?」

「うん!!」

「わ、私からもお願いします!!」

自信満々に頷くレヴィと頭を下げるユーリを見て思わずため息が出てしまう。これだから俺は周りのやつからお人好しだと言われるんだろっな。

「はぁ・・・リリース、個人記録の偽造頼んだぞ」

『そう言つと思つて空港の偽造は済ませてあるわ。後のキチンとしたのはミッドに戻ってからになるけど』

「それでいいよ」

「え?それって・・・」

『マスターはね、元から貴女たちを引き取るつもりだったのよ。でもご覧の通り肝心なところでへタレだから貴女たちの言葉で自信を着けたかったのよ』

「リリースう!お前は俺を誉めたいのか!?それとも凹ましたいのか!？」

『そんなの両方に決まってるじゃない』

「〜!!」

リリースの言葉に頭をガシガシと掻きむしる。確かにそう思ってたけどわざわざバラさなくてもいいじゃないか!!

「ねえねえネル」

「あの・・・ネリアル」

「ん?なにさ?」

「これからよろしくね」

「その・・・宜しくお願いします」

良しとするか。でもこんな嬉しそうな笑顔の二人を見れたなら、まあ

綺麗なスカさんはお嫌いですか？

あの後二人の服を買ったり個人情報操作やらで時間を費やして一週間後、俺たちは第一管理世界ミッドチルダ、その郊外にある廃墟に来ていた。ここはミッドチルダであってミッドチルダで無い場所と言われるほどに荒れていて計画やプロジェクトの頓挫によって放置されたビル群があるために犯罪者の巣窟になっている。どうしてこんな場所にいるかといえばこの二人を診てくれる友人に会うためだ。ユーリは雰囲気には圧されてビビっているのか俺の服の袖をつかみ、レヴィはそんなことお構い無しといった具合で俺の上に座って肩車を満喫している。

「あの、どうしてこんな所にそのご友人さんはいるのですか？こんな所じゃなくてミッドチルダの町なら治安も安全ですよ？」

「まあそいつが管理局に楯突いて指名手配されてるから。でも良いやつだぞ？マッドサイエンティストだけど匿名で孤児院に募金とかしてるし」

「すごい！！映画のセットの中に見えるみたい！！」

「あ〜こらこらレヴィ、人の上で暴れるなよ。ってか待て、胡座を組んで左右に振るんじゃない。流石に転蓮華は不味い」

地味にレヴィに命を握られながら廃墟の奥へと進んでいく。すると開けた場所に出て、先程まで感じていた視線が無くなった。つまりこの辺りか。

「ユーリ、レヴィ、ちよいと離れてて  
「ネル？」

疑問に首を傾げながらも二人は離れてくれた、そして広場の中央に向けて一人で歩く。

「エアライナー!!」

すると突然俺を囲むようにして黄色い道が出現する。そしてその道を一人の少女が機械仕掛けのローラースケートで加速しながら突っ込んできた。狙いは俺一人、目線と振りかぶられた拳は真っ直ぐに俺に向けられている。

「リリースセットアップ」

『了解よ』

即座にリリースをセットアップ、跳躍して拳をかわし空中にできた黄色い道を蹴って少女の後ろをとる。胴に向けての蹴りを腕でブロックされるがそのまま脚を空中に残した状態で顔面に目掛けて回転蹴りを放つが避けられる。が、それも予想内。ブロックした腕をとり、回転蹴りで避けられた蹴りを戻して後頭部に踵を叩き込む。そのダメージでふらついた瞬間に足払いをかけて少女をうつ向けになるように倒して腕の関節を極める。技名があるか知らないけど着けるなら裏十字固めってところか？

「いたたたたっ！ギブギブ!!ギブアップ!!」

「まったく・・・お前は毎度毎度どうして会う度に殴りかかる。肉体言語で挨拶するのがお前の常識か」

「むゝ・・・だって兄貴に勝ちたいんだもん」

「だもんじゃねえよ、俺なんてお前のワンパンで下手したらバコオなるんだからな」

「そう言いながら兄貴一度も攻撃食らってないじゃないか。先手とつてもサブミッションで簡単に返されるし」

「ネル、この人誰？」

離れていたレヴィがユーリを連れて近づいてきた。そう言えば初対面……そもそも会う奴について何も教えてなかったな。

「こいつはノーヴェ、今から会いに行く奴の娘だ」

「どうもノーヴェです」

「僕レヴィ!!」

「は、始めまして、ユーリです」

レヴィとは似たような性格で相性良さそうだがユーリはちょっと厳しいみたいだな。見た目の年が近そうだから友人になってほしいけど。

「ノーヴェ、今回も負けましたね」

「あ、ウーノ」

廃墟の影から一人の女性が現れる。ウェーブがかった薄紫の長髪で白衣を着ておりこの場の雰囲気にとぐわない。彼女はあいつの秘書兼助手、そして……

「ノーヴェ、何度いったらわかるのですか。私のことはお母さんと呼ばなさい。もしくはママでも可です」

あいつの妻を自称しているのでノーヴェに自分のことを母と呼ばせたがっている。一見すればお似合いなんだけどなくあいつとウーノさん。早く結婚したらいいのに。

「ウーノさんお久しぶりです」

「ネリアルさん、すいません毎度毎度うちの子が」

「いえいえ、子供ってのは元気でナンボですからね、このくらいがちょうど良いとびです」

「そう言ってもらえるなら幸いです。それで・・・彼女たちが」

「ええ、連絡していた件の二人です」

「わかりましたそれではこちらにどうぞ」

ウーノさんが廃墟の一つの中に入っていき、ノーヴェもその後を追って姿を消す。俺たちもウーノさんに続いて廃墟の中に向かうことにした。

「ねえねえ、今から誰に会うの？」

「んー、名前いってもわかるか微妙なんだけどな。もしかしたら知ってるかもしれないな」

「ジェイル・スカリエッティって知ってるか？」

廃墟に隠されていた転移ポットで転移した先は洞窟であり、そこを出ると森の中だった。そこからさらにウーノさんの案内で先に進むと草原があり、その中央に気のできた家が一軒だけ立っていた。良く

見ると屋根の上に誰かが立っている。

「良く来たねえネリアル君!! 私Dr・スカリエッツィは君のことを盛大に歓迎するう!!」

紫の長髪と白衣を風に靡かせて悪人面の似合う男性が何処かで聞いたことのある言葉を捻った言葉で出迎えてくれた。でも何だろっ、少しイラッとする。

「リリース、魔力スフィアっ」

『狙うなら顔面よ』

リリースの補助の元で紫色の魔力スフィアが一つ現れる。それを足元に落として蹴り飛ばす。弾丸のようなスピードで飛んでいく魔力スフィアは真っ直ぐにジェイルの顔面に吸い込まれていきー

「あぶなっ!?!」

「ちっ」

『ちっ』

寸のところかわされた。思わず舌打ちをしたがそれでバランスを崩したのかジェイルは屋根から落ちた。

「やった!!」

『第三部完っ!!』

「残念、私がここにいます」

俺とリリースがジェイルが落ちたことに歓声を上げるも落下地点に先回りしていたウーノさんがジェイルを横抱きの姿勢になるようにキャッチした。ジェイルは助かったという表情になったがジェイルを見てうっとりとしているウーノさんを見てひきつった笑いを浮か



べていた。

「ようジェイルおひさ」

「開幕の挨拶と行いはスルーかね・・・久しぶりだな、ネリアル君。そしてその二人が連絡にあったプロジェクトRの？」

「そうだよ。ユーリ、レヴィ、こいつはジェイル・スカリエッティ、マツドサイエンティストで子供見てウヘウヘ笑う変態でウーノさんの旦那さんだから色んな意味で気を付けて」

「やあ私がジェイル・スカリエッティだ。ドクターでもスカさんでも好きに呼んでくれたまえ」

「僕、レヴィ・ザ・スラッシュャーだよ!!」

「は、始めまして、ユーリです」

「これはこれは礼儀正しいお嬢さんたちだ。ウーノ君、彼女たちを診察室に案内して診てあげなさい。流石に私が見るのは気が引けるからね」

「わかりました。では、その後は食事になりますか？お風呂にしますか？それとも私にしますか？」

「ハッハッハ〜巫山戯てないで診察しなさい」

ジェイルに冷たく返されてウーノさんは落ち込んだ素振りを見せながら家の中に入っていった。だが俺は見てしまった。その顔が嬉しそうににやけているのを。口元が「冷たい・・・でもそれも良い・・・」と動いているのを。少し不安に思ったが二人もウーノさんに同行させて家の中に入っていった。

「さて、ようやく腹を割って話せそうだな。ああ、安心してくれて良い。先程周囲を感知したがサーチャーの類いは見られなかったよ」

「そいつは上々。前もって連絡した通りに二人はプロジェクトFを雛形に作成されたプロジェクトRのマテリアルと呼ばれるプログラム構築体のクローンだ」

『管理局の目が怖かったから出来なかったけどさっき貴方の端末にプ

プロジェクトRの資料を転送しておいたわ』

「プロジェクトRね・・・たしか私が管理局に関わっていたときにそんなプロジェクトが計画されていると聞いたことがある。でもその後直ぐに管理局から離れたからどうなったかわからないけどね。それにプロジェクトFか・・・それは私が基礎理論を構築したプロジェクトだが・・・どうやら当初の目的から大きく外れているみたいだね」「元々プロジェクトFの目的は完全な個人の再構築だったらしいな。だとするとプロジェクトRはプロジェクトFを修正しているだけにすぎない。二人を見たところほとんど成功しているみたいだけだな」「なるほど・・・プロジェクトRの責任者と一度あって話してみたいな」

うつろい出たよジェイルの悪い癖、マッドスカリエッティ。自分の興味があることだとことごとく追求するなんとも科学者らしき気質。素晴らしいとも言えるけど決して良とも言えないんだよな。

「うん、二人の調整は任せたまえ。例えクローンだとしても並の人間以上に生きれることを保証させてもらおうよ」

「流石ドクターを名乗るだけはある、頼んだよ」

『むっ・・・マスター、メールが届いているわよ』

「メール？誰から？」

『ゲンヤ・ナカジマからよ』

「ゲンさんから？」

・・・な〜んか嫌な予感がひしひしとするんだが。投影されたディスプレイに現れた新着メールの欄をクリックしてメールを見る。そこには信じられないことが書かれていた。

『ネリアル、ゲンヤだ。』

すまんが一週間後に第97管理外世界【地球】の囑託魔導師たちと模擬戦を行うことになった。

お前も強制参加で事前に打ち合わせがしたいから良い日があったらメールで教えてくれ』

・・・ファ!?

## 親子の会話とついでに処刑

ミッドチルダにある時空管理局地上本部で一人の初老の男性が仕事をしていた。彼の名前はゲンヤ・ナカジマ、108部隊の隊長である彼はデスクワークに勤しんでいた。

「隊長、失礼します」

「おう、どうした？」

「隊長に面会を希望されている方がおられます。ネリアルと言えわかるとおっしゃっていましたが」

「ネリアルか、大丈夫だ、通してくれて問題ないぞ」

「はっ、失礼します」

部下からの報告を受けたゲンヤは一発は殴られることを覚悟した。ネリアルはお人好しと呼ばれる人種だが流石に勝手に模擬戦を組んだことに怒っていることは容易く想像できた。

そんなゲンヤに待ち構えていた洗礼は延髄蹴りからのフランケンシュナイダーであった。

「おいゲンヤ、なに勝手に模擬戦組んでくれたんだこの野郎が」

「首っ！首があ・・・お前、いきなり延髄蹴りからの投げとか殺すつもりか!!」

「半分は殺るつもりで殺った、後悔なんぞ置いてきた」

「さっさと拾い直してこいよ!!」

俺は隊長室に設置されているソファーにふんぞり返りながらゲンヤと対面していた。いきなり延髄蹴り+フランケンシュナイダーのコンボかました俺もあれだがそれを受けて無事なゲンヤも大概だな。

「で、なんで俺が地球出身の魔導師連中と模擬戦なんぞやらないけないんだ?」

「ああ・・・レジアス中將からの依頼だよ。今度の地球の魔導師たちとの模擬戦でお前を使えとさ」

「レジアスのじいさんか・・・そっちから話を聞いた方が早そつだな」  
「そうしてくれよ・・・っちょっと待て、なんでバリアジャケツトを起動した?」

「腹の虫が収まらんから」

「止めろおおおおお!!!」

ネリアルが出た後で隊長室に向かった部下が見たものは泡を吹い

て倒れているゲンヤの姿だった。さらにその側には「クイントさん、よろしく願います」と書かれたメモが置いてあり、それを見たゲンヤの妻クイント・ナカジマはいい笑顔を浮かべながらゲンヤを連れて帰ったという。翌日、クイントは艶々とした様子で、ゲンヤはゲツソリとした様子で地上本部に出勤してきた。

「ようじいさん」

「ネリアルか、そこに座れ」

ミッドチルダにある一軒の居酒屋で俺は時空管理局地上部隊の顔とも言えるレジアス中将と会っていた。周りには会社帰りか騒いでいる人たちもいるがこうした場面の方が人の目が向きにくいものだ。よくいうだろ？木を隠すなら森の中、人を隠すなら人混みの中って。

「久しぶりだな、元気にしてたか？」

「まあそこそこには。そっちこそちゃんと飯食ってるのか？痩せてる気がするぞ」

「心配せんでも三食食べている」

騒音をBGMに俺とレジアスは酒を飲む。こうしてレジアスのじいさんと対面するのは久しぶりだな。最後に会ったのはたしか年始の時だったか。お互いに近況を報告しあい、良い具合で酔いが回って

きたところで本題に入ることにする。

「じいさん、今度の地球出身の魔導師連中との模擬戦のことだけど」  
「やはりその事か、たまには仕事の話無しで飲みたいものだな」  
「ワーカーホリックが何を言ってるんだよ」  
「良いではないか。養子縁組とは言え農らは親子なんだぞ」

そう、じいさんが言った通りに俺とレジアスのじいさんは血の繋がりは無いが親子の関係に当たる。でも年が離れているのもあって俺はレジアスのことをじいさんと呼んでいる。まあそれでもじいさんは受け入れてくれているが。

「今回の模擬戦は表向きには模擬戦になっているが本当は地と空、どちらが優れているかの競争の舞台になっている」

「やっぱり空の関係か、じいさん空の連中嫌いもんな」

「当たり前だ!!魔力やレアスキルがあるだけでこのミッドチルダの平和を守れると思ってる連中を誰が好きになれる!!」

飲み干したグラスを叩きつけてじいさんは叫ぶがそれも居酒屋の喧騒の中に消えてしまう。じいさんは誰よりも平和を望んでいる。それなのにそのために必要な戦力はすべて空の方にへと流れてしまうために最終的な皺寄せはすべて地上の部隊に寄せられる。一般的にレジアスは過激派として知られているがそれは誰よりも紳士に世界の平和を願っていることの裏返しである。だからこそ魔力やレアスキルで持て囃される空の連中を憎んでいるのだろう。

「ネリアルこれは意地だ、地上の意地なんだ。地は空に劣ってなどいないことを示す絶好の機会なのだ。頼む、模擬戦で空の連中を倒してくれ」

じいさんが俺に向かって頭を下げる。じいさんがこの模擬戦にど

れだけ入れ込んであるかこれまでのじいさんを見ていればわかる。空に優秀な連中が入る度に悪態をついていた。地上の部隊に新人が入る度に喜んでいた。その新人が空に引き抜かれた時は酒を飲みながら涙を流していた。俺はそのことを知っている。だからお人好しな俺がすることは一つだけだ。

「じいさん、じいさんのやりたいことは良くわかってる。この模擬戦にどれだけ入れ込んでいるか良くわかる。じいさんの夢は俺の夢でもあるんだ。だから頭を上げてくれ。模擬戦には出てやるよ、魔力やレアスキルだけで意気がつてる連中の鼻をへし折ってやるよ、今は楽しく酒を飲もうや、親父」

「ネリアル………ありがとう」

俺の言葉に滅多に見せない涙を見せながらじいさんはグラスで俺から注がれる酒を飲み干して笑ってくれた。久しぶりにじいさんと笑いながら飲む酒はこれまでに無いぐらいに美味しく感じられた。

「リリース、今度の模擬戦負けられないな」

『あら、貴方は負けるつもりだったのかしら？私は最初から勝つつもりでいたのだけど』

「ははっ、こいつは手厳しいな」

「リリース、ネリアルのことをよろしく頼んだぞ」

『言われずともよ、マスターを守り補助するのはデバイスである私の役目よ。マスターがへましない限りね』

「お前は本当に俺のことを落とすのが好きだよな」

この会話が面白かったのかじいさんは大笑いしていた。じいさんは俺の恩人だ。あれですべてを無くしてくれた俺に色んなものを与えてくれた。だから今度は俺がじいさんに返す番だ。

「リリース、勝つぞ」



『当然よ』

余談だが、家に帰ったら食事の用意をし忘れて空腹になっていたレ  
ヴィに噛みつかれ、ユーリからはジド目で睨まれた。締まらないな。

## 模擬戦前

サンサンと輝く太陽、雲一つなく澄みわたった青空、頬を撫でる風は冷たくもなく暑くもなく程よい温度でミッドチルダを駆け抜ける。はあ・・・こんな日に外で昼寝でも出来たら最高なんだろうな・・・

『どうせ模擬戦が終わったら倒れるんだから同じじゃないかしら？』  
「リリース、それは寝ると言わずに気絶しているというんだ」

そんな最高の日に行われるのは陸対空の模擬戦、相手は高魔力ランク保持者にレアスキル持ち、最近地球が修羅の国に思えてしょうがない。どうして魔法文化のないはずの世界でポンポンそんな奴らが出てくるのかねえ。

「はあ・・・最っ高に最っ低だ」

「こら〜ネル君、やる前からそんなこと言ってちゃダメよ」

「まあ気持ちはわからないでもないですけどね」

「それでもやらなければいけない時もある」

「ルー、お母さん頑張るから見ていてね」

黄昏ていると後ろからお叱りの声を受けた。振り替えればそこにいるのは男二人と女二人の四人組。男二人はじいさんの親友で自分の部隊を持つゼスト・グランガイツ、もう一人は執務官を目指して現在地上の部隊で点数稼ぎに勤しんでいる妹好きシスコンティータ・ランスター。女二人はゲンさんの奥さんのクイント・ナカジマ、そして赤ん坊の写った写真を見て何やら呟いているのがメガーヌ・アルビーノ。ゼストさんとクイントさんとメガーヌさんは地上の主力とも言える人物で、ティータは優秀な隊員として注目を集めている。いわゆる地上のオールスターメンバーとも言える人たちがこの模擬戦

に参加することからじいさんが本気で勝ちたいことが伺える。

「ゼストさん、クイントさん、メガーヌさんお久しぶりです」

「久しいなネリアル、体は鈍っていないか？」

「程ほどに整えてありますよ」

「ネル君お久しぶり、先日は夫がごめんなさいね」

「まあクイントさんが搾ってくれたならチャラにしますよ」

「ねえネル君、ここで勝てば娘にお母さん凄いつて誉めてもらえるかしら？」

「たしか娘さん三才かそこらですよね？ならまだわからないんじゃないんですか？でも勝てたなら将来お母さんはこんな人たちに勝ったんだって武勇伝聞かせてあげられますよ」

「なあネル、最近ティアナが冷たいんだがどうしたら良いと思う？」

「ツンデレなのか反抗期なのか見極める」

家族関係でバカになりつつある二人を交えながら会話に花を咲かす。実はここにいる全員と俺は交遊関係がある。そのためにコンビネーションの方には不安はない。じいさんはこれを狙ってこのチームを組ませたかもしれないな。

「ようネル、久しぶり!!」

「アギトか、相変わらず小さいな」

「ほっとけ!!」

ゼストさんの影から現れたのは体長が30cm程しかない小さな少女。名前はアギトといい所有者と融合することで所有者を強化するユニゾンデバイスと呼ばれる存在だ。過去に俺とゼストさんの部隊で違法研究している研究所を制圧した時にいたのがアギトで、それ以降アギトはゼストさんのデバイスとしてゼストさんの部隊に所属している。

「はぁ・・・にしても向こうは全員が魔力ランクAAA以上、加えてレアスキル持ちもか・・・泣けてきますね」

事前に渡されていた相手に関する資料を引っ張り出して再度確認する。高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやて、織主真、彩瀬文、それに加えて八神はやてのユニゾンデバイスであるリインフォース・アインス。誰も彼もが例外なく魔力ランクAAA以上、加えてレアスキル持ちとか無理ゲー通り越して絶望ゲーだ、泣きたくもなる。しかも全員が十二歳、中学校一年生と来たものだ、地球マジ修羅の国。

「だが我らは勝たねばならぬ、地上が空に劣っていないことを示すためにな」

「まったく、ゼストさんは熱いですね。その熱さの半分でも俺に欲しかったですよ」

「ネル君、どこに行くのかしら？」

「タバコ吸いに、ここには体調崩されたら困る方がいらっしやるからね」

クイントさんの疑問に一言断りを入れてから喫煙所に向かいタバコを吸う。元々は大人の真似をしたくて吸っていたはずなのに今じゃ立派な愛煙家だ。まあだからといって後悔はしていないが。二本ほどタバコを吸って満足したところでみんなが待っている控え室に戻る。その道中で曲がり角を曲がる際に不注意から誰かとぶつかってしまった。俺は平気だったが相手は体制を崩したらしく床に倒れてしまっていた。長い銀髪に赤い目、そして整った顔つきと整ったプロポーションという絶世の美女とも言っても過言では無い人物。どっからどう見ても八神はやてのユニゾンデバイス、リインフォース・アインスです本当にありがとうございました。

「すみません、大丈夫ですか？」

「ああ、すまない。こっちも不注意だった」

「それはそうと・・・早く立った方が良いですよ」

「どうしてだ？」

「・・・スカートの中身が見えそうですから」

そう言つとリインフォースさんは顔を赤くして座りながら姿勢を正した。こちらをにらめつけるオプション付きで。俺は悪くねえ!!  
すべて破壊者が悪いんだ!!おのれディケイド!! 錯乱中

「あゝ見えてませんから早く立ってくださいな」

「・・・すまなかつた」

「こっちも不注意でしたからお相手ですよ。急がれていた様子ですけどどこかに向かわれる最中でしたか？」

「そうだった!!早く主の元へ向かわなければ!!」

「御気を付けて、今度は曲がり角に注意して下さいよ」

「い、言われなくてもわかつている!!」

「こちらの指摘に顔を赤くしながら反論しつつもリインフォースさんは走って去っていった。

『あれが空の側のユニゾンデバイスね』

『どこからどう見ても普通の人間にしか見えないよな』

『アギトにこの事を言ったら羨ましがるかしら?』

「かもな、アギトは何気に小さいことを気にしていたし」

『器も小さければ心も小さい奴ね』

「言つてやるなよ」

リリースと会話しながらもどうやって空の化け物共と戦つのか頭の中でシミュレーションしながら俺は控え室に向かって行った。

## 模擬戦・吉

何もなかったはずの広場に突如として廃墟ビルの群れが立ち並ぶ。詳しいことは知らないがたしか実体化するホログラムの様な物だったはずだ。触ってみれば固いコンクリートの感触、軽く殴ってみれば拳から痛みが感じられた。なんだよ、幻が実体化するって、恐ろしい程のオーバーテクノロジーじゃねえか。辺りを見渡せば監視用の魔力スフィアが何個か飛んでいる。たしかこの模擬戦は中継されることになっているとかじいさんが言ってたっけな。完璧なお祭り騒ぎ、これが管理局の実態かと思うと悲しく感じられる。

「準備は良いか？」

デバイスである槍を構えたゼストさんが全員に確認をとる。クイントさんはナックルを両手に着けてシャドーボクシングをしながら頷き、メガーヌさんはグローブをはめて伸びをしながら生返事、ティータは銃の調整をしながらきちんと返事を返した。俺もリリスをセットアップしてストレッチをしている。体調は悪くない、あとはこれで気分が乗れば十分な

パフォーマンス 戦闘 を行うことができる。

「でも本当に作戦指揮官が俺でよかったですか？ゼスト隊長かネリアルの方が経験豊富だから的確な指示ができると思うのですが」

「そう自分を下比するなティータ、お前の才能は俺もだがレジアスも十分に買っている。だから存分に俺たちを使い潰すといい」

「いいじゃねえかティータ、お前は所詮参謀みたいなやつだろ？俺なんて気がついたらリーダーになってたんだぞ。今回の模擬戦で負ければ俺が責任をとることになるんだとさ。ふざけるなとぶちギリた  
いね」

「えっネリアルが責任とるのか？なら安心して失敗できるな」

「ふざけんじゃねえぞ変態シスコン野郎が。てめえが妹と一緒に風呂に入ってハアハアしていると言いつらすぞ」

「そ、そそそそそんなことあるわけないじゃないですかー!!」

「……」

「……」

「……」

「……ゼストさん」

「ああ……もしもし、時空管理局ですか？ここに変態がいます」

「ゼスト隊長おおおお!!!」

友人だと思っていたやつが変態だった……知りたくなかった。

「まあ戯れ事はさておきだ」

「いやいや、さっきのはわりかしガチのやつですよ!」

「ネル君、気にしたら負けだと思っつ」

クイントさんが遠い目をしている……どうしてこうなったんだ。適当に冗談舐めかしたただけだったのに。

「この戦勝つぞ、地上の意地の為に」

ゼストさんが槍を差し出す。これは地上部隊恒例の誓いというやつだ。自分の守るべきものを口にして言うことで自身の意思を固めるためのもの。

「娘のために」

メガーヌさんが上から手を添える。

「家族のために」

クイントさんがナツクルを添える。

「妹の為に」

へんた……ティードが銃を添える。この模擬戦が終わったらいっつの性癖を矯正してやろう。そうすることがいっつの妹の健全な未来を守るためでもあるんだ。

「義父の意地と、俺の意地の為に」

最後に俺が上からスパイクを添える。ちゃんと刺さらないように爪先を上に向けてだ。

「……」の信念に誓い、我らが守るべき者たちを必ず守り通す!!!

ブザーが鳴り響く。ここに地上の意地を賭けた模擬戦が開始された。

ブザーが鳴り模擬戦が開始されると地上の対戦相手である地球出身の魔導師たちはフォーメーションを陣取った。フェイト・T・ハラ



オウンと織主真が前衛、高町なのはと八神はやてとリインフォース・アインスが中衛、彩瀬文が後衛。各々の武器、得意魔法等から判断した陣形だ。フェイトの義兄である執務官のクロノ・ハラオウンからも悪くない陣形と御墨付きを頂いている。

ただし、彼らに言いたいことが一つだけある。悪くない判断がイコール最善であるとは限らない。

「来たぞ!!」

織主真が激を飛ばす。真つ正面から陣形に向かってくるのは地上魔導師の一番槍ゼスト・グランガイッ。たった一人で六人に向かってくるのは自信の現れかと思いい織主とフェイトはゼストを撃破するために前へと出る。その行動を見届けてゼストは念話による通信で合図を出した。そして廃墟の影から現れる四つの人影、それらの容姿はティーダ・ランスターとまったく同じ容姿をしていた。ティーダの得意魔法は幻影、同一人物が複数現れる事態に地上魔導師たちは一瞬動きを止める。そこを逃さずに地上魔導師たちは追撃をかける。

「おいで、白天王」

動きが止まった地球魔導師たちの頭上から巨大な獣の拳が落ちてきた。メガーヌ・アルビーノの得意魔法は召喚、彼女が使役する中でも最高クラスの召喚獣の一撃は地球魔導師たちに避けられて地面を砕くだけに終わってしまった。しかし当たる当たらないはもんだいではない。元より地上魔導師たちの目的は地球魔導師たちの陣形を崩すことであつたのだから。白天王の一撃で舞い上がった砂埃に紛れて八神はやてに向かう一つの影。彼の名はネリアル・ミッド、地上部隊で組まれたチームの中で唯一の囑託魔導師。

「八神はやて捕捉」

「な、なんや!? キヤ!!」

突如接近してきたネリアルの放つ蹴りに対して三角形のシールドを張ることで身を守るうとするが一撃目のバリアブレイクで砕かれ、追撃に放たれた回り蹴りに吹き飛ばされる。直前で杖を楯に置くことで直撃は避けられたがそれでも勢いは殺せずはやては廃墟のビルにぶつかった。

「いった〜」

「ウィングロード」

身を起こすはやての前に現れたのは空に走る青い道、そこをローラーシューズで駆けながら近づいてくるのはクイント・ナガシマ。加速を繰り返しながらクイントはデバイスであるリボルバーナックルから大量の薬莖を吐き出していた。

『最初に落としておきたいのは八神はやて、次いでユニゾンデバイスのリインフォース・アインスですね』

高まる魔力を感じながら彼女は事前に行われた作戦会議を思い出していた。

『どちらとも広域魔法が得意、さらにリインフォース・アインスは近接戦もできると聞きます。なら最初にこの二人を落としてこちらが殲滅されるのを防ぎたいですね』

『同意見だな、となるとまず行くことは奴等の分担か』

『ゼストさんとメガーヌさんとティータが掻き乱してください、その隙に俺が八神はやてを弾き出しますからそこをクイントさんが決めてください』

走ることと殴ることしか脳の無い自分を押ししてくれた仲間たち、そ

んな彼女を愛し支えてくれた夫と二人の娘たち。そんな彼らの期待に答えるために彼女は加速を続ける。

「――撃！必！滅！」

過去最速とも言つてよい速度でクイントははやての前に到着する。はやても身を起こすのは困難だと判断したのかシールドを張るがそのやうな障害はクイントの一撃の前では紙同然だった。

「リボルバーシュート!!!」

上からシールドを叩き潰す勢いで放たれたクイントの拳はシールドを砕きはやての腹部に強烈な一撃を叩き込んだ。殴られたはやては彼女のいた廃墟ビルから飛び出して隣のビルへと飛び込む。さらにそのビルを貫通するという行為を繰り返して五つ目のビルでようやく止まった。もしこれが非殺傷設定でなかったら今ごろ八神はやてという人物は壁を染め上げる血の染みになっていただろう。無論非殺傷設定であっても戦闘不能であることには代わりないが。

「まずは一人目ね、はやく戻らないと」

はやてが沈黙したことを確認してからクイントは仲間の待つ戦場へ空の道を走って向かって行った。

八神はやて、戦闘不能

## 模擬戦・弐

八神はやての撃墜の報告が入られると地球魔導師たちは動揺を露にした。八神はやてといえはロストロギア夜天の書の主にして魔力ランクSを誇る地球魔導師たちの主力と言っても過言ではなかった。はやてを中心とした作戦を考えていた地球魔導師たちは出鼻を挫かれる結果となった。

「我が主!!」

「どこに行くつもりだい?お嬢さん」

はやての元に駆け付けようとするリインフォースの前に立つのは先程はやてを蹴り飛ばしたネリアル。飛んでいるリインフォースに対して飛べないネリアルはビルの縁に捕まることで同じ視線に立っていた。

「お前はさっきの・・・」

「心配しなくても生きてるし、騎士たちの中には優秀な回復役がいると聞いている。なら安心してごっちを見ろよ、俺は敵だぞ、倒せる敵を前にして敵前逃亡はあり得ないぜ」

「ならば貴様らを倒して一刻も早く主の元へと駆け付ける!!」

六羽三対の翼を羽ばたかせながらリインフォースはネリアルへと突進する。そのスピードは並の魔導師の飛行速度よりも数段早く瞬間にネリアルとの間を積める。予想通りと声に出さずに呟きネリアルはリインフォースに背を向けて逃走した。

「貴様逃げるのか!!」

「戦略撤退ってやつだよ」

リインフォースの言葉にしれつと返答をしながらネリアルはさらに速度を上げてビルとビルの間を駆け抜ける。それを追うリインフォースだが内心ではネリアルのスピードに驚いていた。直前で追いかけるリインフォースよりもビルを蹴って逃げるネリアルのスピードの方が明らかに速いのだ。僅かに差が開かれながらも追いかけて、ようやくネリアルは地上に着地して止まった。

「もう逃げないのか？」

「ああ、これだけ離ればあっちに被害は出ないだろうからな」

そう言われてリインフォースは自分が誘い出されたことを悟った。自分の仲間への被害を最小限にするために敵を挑発して誘い出す、リインフォースはネリアルの評価を改めた。というのも事前に地上魔導師たちのある程度の情報は地球魔導師たちにも伝えられておりその中でも魔力ランクが低ランクなネリアルにリインフォースは疑心を抱いていたが織主真の「低ランクの魔導師だから無視してもいいだろ」という言葉にうやむやにされていた。もっとも最後までリインフォースと彩瀬文はネリアルのことを疑っていたのだが。

「お前一人でこの私を倒せると？大した自信だな」

「俺一人？なに言ってるやがる。ここにはデバイスもいるんだぜ？実質二対一で数の上ならこっちの有利だろうが」

そう言つとネリアルは黒いロングコートを派手に翻しながら役者染みた台詞を口にする。

「空はお前の舞台だ、美しい容姿と艶かしい肉体が見るものを魅了する超一流の役者だ。俺も客席にいたなら引きずり込まれていただろうよ。」

だがここはどこだ？地上じゃねえか！！つまりここは俺の舞台だ！！

つまりは俺の独壇場ってやつだ!! 観客全員スタンディングオペーションの絶頂を迎えさせてやるよ!!」

そこまで言うとなリアルは地面を蹴り、空中にいるリインフォースに蹴りを放つ。これに対しシールドを張り、反撃の魔法を放とうとしたリインフォースだったがシールドは容易く砕かれ回避を余儀無くされる。ならば着地したところを狙い撃とうと構えるもネリアルはビルを蹴り別のビルに移ることで狙いを定めさせない。着目すべきはこの動き方、いつ崩れるかわからない廃墟ビルを蹴りながらも縦横無尽に動き回りさらにはその速度は落ちてはいない、寧ろ加速しているようにも思える。これがネリアルの対空中魔導師戦法。高みから安全に狙撃しているのであれば狙いを定められないように動き回ればいい。単純にして効果的な戦法ではあるが実践できるものは少ない。ネリアルはこれを実現できる数少ない一人であった。

「ならば、闇に沈め」

狙い撃つことを止めて辺り一帯に殲滅魔法を放つ点ではなく面の攻撃で焼き付くことを決めたりインフォースは手元に黒い球体を出現させる。ネリアルのような高速機動を重視したタイプの魔導師はどうしても防御面で脆くなってしまう。実際に地球魔導師のフェイト・T・ハラオウンもそうだ。たしかにこの方法はネリアルにとって脅威的であるがなんの対策もしていないわけではない。

「ディアボリック・エミッション!!」

「来たぞリリス、たらふく喰らえ!! 踵フリスの名は魔剣シゼル!!」

球体が急激に膨張して辺りを焼き付くそうとするのに対してネリアルは打った手は蹴りを二度行い、斬撃を放つこと。普通であるならば球体は斬撃ごとネリアルを飲み込み撃墜判定を下していたであろう。

「なにっ!？」

しかし現実には逆に斬撃が球体を飲み込んだ、いや吸収したといった方が正しいだろう。球体を吸収した斬撃は巨大化、加速してリインフォースを襲う。それにリインフォースはシールドを張ることで身を守ろうとする、かつて闇の書として高町なのはとフェイト・テストアロツサと戦ったときには十分すぎる守りを見せていた。だがそれは悪手。シールドと接触した瞬間斬撃は球体にへと変わり、膨張してリインフォースを飲み込んだ。球体による魔力の嵐が腫れた後に残されたのは満身創痍なリインフォース、対するネリアルはどこ吹く風で飄々としていた。

「魔法のコントロールを奪う魔法だ?!？」

「ん？初見さんかい？アーパードもが闊歩するベルカの時代なら普通だと思っただけど？てかなんだよベルカの騎士連中って、なんて素で砲撃を切り裂けるんだよワケわからんわ」

知り合いのベルカ騎士を思い出したのか顔をしかめるネリアルを見て夜天の騎士である フレッドハッピ 戦鬪狂 を思い出して少し同情したくなつたがそれを振り払いリインフォースは対策を練る。要するにあの蹴りを放たせなければいけないだけのこと。ならば広範囲を焼き尽くす一撃ではなく点の攻撃を面で叩き込めばいい。そう結論付けたリインフォースはネリアルの周囲に赤い短剣を展開させる。不用意に放し行動を起こさせるよりも近すぎるくらいがちょうどいいと判断して短剣はネリアルから5mも離れていない場所に設置した。それを見たネリアルは何が可笑しいのか笑っていた、それもリインフォースに聞こえるくらいに大声で。

「何がおかしい、気でも触れたか」

「いやね、ここまで上手くいくとは思わなんだわ」

「……………」

「まだわからないのか？ 虚言虚構の世迷い言、つまりは」

「二撃連滅!!」

「グッ!？」

「ただの詰まらない戯れ事だよ」

後ろからやって来る強い衝撃に顔を向けるとそこには青い道に乗っているクイントが拳をぶつけていた。ネリアルのいった戯れ事……………つまりここに来て戦闘を行い、さらに魔法を奪う魔法を見せる一連の流れにいたるまですべてはネリアルの想像通りだったということになる。ネリアルにベルカの争乱の最中に生まれ、さらに最悪を冠した魔導書の管理融合騎であるリインフォースを倒せる手は少ない、無くはないがこのような不特定多数が見ている中では使うつもりは無い。【踵の名は魔剣シゼル】を見せただけでも個人的には大判振る舞いといっても良いほどだ。故に、ネリアルはリインフォースを当たれば打倒しうるほどの切り札を持った人物、クイントに任せることにしたのだ。ネリアルはいわばただの囷、本命のクイントがやって来るまでリインフォースの目を集めるだけの撒き餌に過ぎない。そしてネリアルの策はここに成功した。

「ツインリボルバー!!」

「ガア!!!」

一撃、二撃と連続して放たれた打撃を受けて吹き飛ばされるリインフォース。そしてネリアルはそんなリインフォースに向けて飛び出した。

「落ちろよ」

飛んできたリインフォースを足で絡めとり受け身の出来ない状態



にして地面にへと叩き落とす。そこまですれば十分に思えるのだがさらにネリアルはリインフォースの腹部をスパイクで突き刺し完全に行動不可能な状態にした。

『相変わらずえげつないわね』

「動けないと慢心して後ろから殺られるよりは数段ましさ、ところでリインフォースのデータはどうなった？」

『言われた通りに食い散らかさずにコピーだけしたわよ。どうしてこんな面倒なことをさせたのよ、いつもならメルトウィルス注入させるクセに』

「空の魔導師とはいえこいつは管理局の一員だ、ならすり潰れるまで使い潰す。それにリインフォースは貴重なユニゾンデバイスだ、事前に集めておいたアギトのデータと照らし合わせればユニゾンデバイスを作れるかもしれない。もしかしたらリリスがユニゾンデバイスになれるかもしれないぞ？ 念願だったドールに囲まれて眠りにつくことだってできるんだ」

『・・・それは素敵ね、是非とも実現させてもらいたいわ』

「だろ？ そう考えると悪くないもんだ」

クイントはすでにこの場にはいない。監視スフィアも戦闘が行われている場所に飛んでいるために無い。故にネリアルはリリスと己の考えをさらけ出して話し合っていた。リインフォースは気絶していてこの話を聞くことはなかった。

リインフォース・アインス、戦闘不能

## 模擬戦・参

八神はやてに続くリインフォース・アインスの撃墜判定に地球魔導師たちは混乱していた。地球魔導師たちにとって八神はやて、リインフォース・アインス、そして高町なのはの三人は主力砲台といっても過言ではない、その三人の内二人が開始三十分もしない間に撃墜、経験を重ねてきた歴戦の魔導師ならば話は違っていただろうがここにいるのは実年齢精神年齢共に幼い魔導師たち、混乱するもの無理はない。

「シン君どうしよう!!」

「シン!!」

「なのはーフェイトー落ち着くんた!!」

前線でフェイトと織主真が押さえ、その隙になのは、はやて、リインフォースの魔法で相手を倒す、そんな織主が立てた作戦を瞬く間に崩されたことなのはとフェイトは混乱、織主も言葉で落ち着かせようとするが内心では混乱を隠せないでいた。

「くそっ!!どうしてだ!?!どうしてこうなったんだ!!」

「戦場で不要なことを考えれば待つのは死だけだぞ」

「くはっ!?!」

織主の剣型のデバイスと競り合っていたゼストは力を緩め、織主が前のめりになった瞬間に槍の石突きの部分で腹を殴った。バリアジャケットがあるとはいえ魔力で強化された騎士の一撃は守りを貫通して織主の内蔵に衝撃を与える。地球魔導師たちの戦況は最悪、織主はゼストと一対一、なのははどこから放たれている幻影混じりの狙撃に捕まっついていて身動きが出来ない、フェイトはメガーヌが呼び出

した忍者のような格好の人型の召喚獣ガリユーに阻まれて援護も不可能、残された彩瀬文は最初の地上魔導師たちの襲撃の際に消えて連絡もとれない状態になっていた。将棋でいうなら詰み、チェスでいうならチェックメイト、地球魔導師の行く末は負け一色だった。

「才能がある故に惜しいな、その様子では大した訓練を積んでいなかったと見える。才能があるが故の弊害か」

「ふざけるな!!お前に俺の何がわかるって言うんだ!!」

「……お前は倒れるほどの訓練をしたのか?」

「……は?」

ゼストの言葉に動きを止める織主、「こちらを動揺させるための罠かと思っただがそうでもないらしい。

「血豆が潰れるほどに武器を振るっただのか?」

「おい何を」

「血のシヨンベンが出るほどに過酷な戦闘訓練をしてきたのかと聞いているんだ!!クソガキが!!」

ゼストが吠える、表情からは怒りが滲み出ており手に持っている槍は怒りのためか震えている。さっきまでとは違うゼストの豹変っぷりに織主は威圧された。

「テメエラ才能があるやつらはいつもそうだ!!凡人が死ぬ思いでこなしてきたことをあっさりと越えてやがる!!偶々だと?運が良かっただど?ふざけるな!!そんな下らない要因で俺たちが積み上げてきた物を一蹴するんじゃないやねえ!!」

それはゼストが今まで溜め込んできた おもい感情、一般的に言うのであれば嫉妬と呼ばれる物、ゼストは昔は普通の少年だった。ベルカに生まれ、ベルカの風習に触れて正義を冠する時空管理局に憧れた。そ

して管理局に入った時に待っていたのは 持つ者<sup>天才</sup> と 持たざる者<sup>凡人</sup>の格差。ゼストはたしかに古ベルカ式のデバイスを扱える騎士であったがそれ以外は普通の管理局員と大差なかった。幸運か不運か持つ者と持たざる者の間にいたゼストはその立場から管理局の実態を知ることができた。天才は驕り持たざる者を顎で使い、凡人は持つ者を妬み腐っていく。

こんなものが自分の憧れた正義であるはずがない、ならば自身の手で正しい正義に変えればいい。

そしてゼストはオーバーワークともいえる鍛練を積んだ。気絶するのは当たり前、体には青アザを作り続け、例え皮が破け血が吹き出しても武器の素振りを止めない。過剰とも言える鍛練を積み重ねてゼストは現在の役職に登り詰めた。その過程でゼストは同じ志を持った生涯の友と呼べるレジアスに出会った。その時に彼らは誓った。ゼストは現場から、レジアスは中から管理局を変えていくと。それから長い月日が流れて地上の部隊は変わった。しかしまだ空と海が残っている。

故にゼストは目の前の少年に自身の怒りを隠さない。才能にかまけて温い訓練で満足しているガキを叩き潰さねば気が収まらない。ゼストは槍を構える。友の誓いと己の正義を阻む敵を打ち倒すために。

そんな中で一つの電子音が知らせを告げる。

ティード・ランスター捕縛、戦闘不能

この知らせを受けたクイントとメガーヌは僅かながら動揺した。ティードは最有力執務官候補の一人として上げられ幻影のスペシャリストとしても地上で知られている。空からの誘いがあるほどに

だー！ー！本人は自身の飛行魔法の適性が無いことから断っているのだがー！ー！それが戦闘不能、それも捕縛でと来たものだ。それはつまりティードの幻影を見破ったということ。

その知らせを聞き織主は笑みを浮かべてゼストを見た。これで四対四、加えて参謀役のティードが倒されたとなればいくら部隊長とはいえ動揺すると思ったからだ。

しかしゼストは揺るがない、それどころかさらに集中しているように見える。

ゼストは無傷での帰還はあり得ないと考えていた。どのような任務であれども些細なことで隊員が居なくなることなどゼストが部長になってから億劫になるほどに経験している。故にゼストは揺るがず。どのような犠牲があれども果たすべきことは任務の成功。故にゼストは折れず。ティードの犠牲は嘆きもしよう、悲しみもしよう、だが決して後悔だけはしない。故人に気をとられて果たすべきことを果たせないなどナンセンスだ。だからゼストは、

目の前の 魔導師<sup>てき</sup> を倒すことだけに意識を向けていた。

「ふう・・・ティード・ランスター捕縛っと」

足元でバインドに縛られて地に伏しながら転送されるティードを見下しながら地球魔導師の一人彩瀬文は額の汗を拭った。彩瀬は最初の襲撃の際から織主が立てた作戦を見限り独自に行動することを選んだ。その結果、地上魔導師の参謀役のティード・ランスターを捕縛することに成功した。

彩瀬文は転生者である。普通の男子高校生だったはずの彼は事故で死に、よくわからない空間でよくわからない男性に特典を授けられて転生させられた、それも性別を女に変えられて。転生先はリリカルなのはの世界。そのアニメを知っていた彩瀬は原作に関わらずに平凡に生きていくことを決意、しかし同じく転生者である織主真と出会い、気がついていたらあれよあれよと原作に巻き込まれて囑託魔導師として管理局に入れられていた。原作キャラである少女たちのことは嫌いではない、寧ろ友好的な関係であると自負している、八神はやてのユニゾンデバイスであるリインフォース・アインスのことも姉のように思っていた。しかし織主真だけは違う。半ば諦めているが自分のことを引きずり込んだ彼だけは好きにはなれない、寧ろ嫌悪を感情の方が強い。

P T事件を解決に導き、闇の書事件では切った物を封印する剣を使いリインフォースの中の防衛プログラムを封印した。なのは、フェイト、はやての三人は織主に引かれていた節も見えるがそのことを差し引いたとしても彩瀬の中にあるのは織主に対する苛立ちだけだった。

「何が俺は原作に関わるつもりは無いだよ、ガッツリ関わってるじゃないか。しかもプレシアとアリシアのことを見捨てたくせにリイン

フォースだけはちゃっかり助けちゃってさ、しかもボクのことを無理矢理わけのわからない模擬戦に誘い込むし、何で生きてんだよアイツ、早く死ねば良いのに」

前世では俺だった一人称を女と言うことを妥協して決めたボクという一人称を使って苛立ちをまぎらわすために地面を蹴る。そもそも原作のことを知っていたからだけではなく彩瀬に与えられた特典が戦闘向きで無かったことから模擬戦に参加するつもりは無かったのだが原作三人娘の包囲網に囲まれて気がついたら参加することになっていた。リインフォースが慰めてくれなかったら今ごろ彩瀬は涙が尽きるほどに泣いていたに違いない。ある程度苛立ちが収まったところで再び身を隠そうとするが、

「やーやーお嬢さんこんにちは、敵討ちとか下らないことは柄じゃ無いけどティータを倒したってことプラス後衛さんだからって理由で殺らせてもらっぜ？」

黒いロングコートに身を包み足に鋭いスパイクを付けた男、彩瀬とリインフォースが最後までその存在を警戒していた地上魔導師の中で唯一の囑託魔導師であるネリアル・ミットが彩瀬の前に現れた。

## 模擬戦・肆

「ネリアル・ミッド・・・」

「ん、何？俺のこと知ってるの？マジカーユーめいになったものだねー俺もーサインでもあげようかー？」

「いらないよ」

棒読みで話ながらも距離を積みようとしなないネリアルに彩瀬は警戒しながらもマルチタスクで考え続ける。

「（状況は対一、恐らくはやてやリイン姉さんにしたみたいな騙し討ちを得意としたタイプの魔導師。でも囑託魔導師ってことは真っ向勝負もある程度はできるはず・・・ここは逃げて体制を建て直すのが先決だな）」

自らの不利を悟ると即座に牽制代わりに魔力スフィアを数発放ち、彩瀬はビルから飛び降りる。そして着地する前に特典である自身の能力を発動、彩瀬の姿は周囲に溶け込んでいった。これは与えた人物いわく【透明になる程度の能力】、内容は名前の通りに服などの装飾品を含めた自身を透明化させるもの。これはあくまで能力なために魔力を漏らすことさえなければ魔導師に張れることはない。実際にやらされたクロノとの模擬戦では彼に気づかせることなく背後に立つことができた。ただし欠点もある。透明化できる時間は最長で五分、さらに一度透明化を解いた際には一分のインターバルが必要となる。なので彩瀬は別のビルの影に隠れると透明化を解きネリアルの動向を伺った。監視用に放っておいたスフィアにはネリアルの姿は見られない。安堵とともに息を吐き出すと同時に後ろから肩を叩かれた。



「ダメじゃないかー逃げるならもつと逃げない」と

声をかけられると同時に彩瀬は全力でビルから飛び出す、背中には冷や汗もかいている。声の主は確認するまでもなくネリアルだろう。ならなぜばれた？ 隠密は完璧だったはず、しかも監視用のスフィアにはネリアルの姿は見えなかったし気配も一切感じられなかった。

がむしゃらに透明化したまま走る。振り替えればすぐ後ろにあの男がいるような錯覚から逃げるように必死になって走り回る。そして開けた広場に出たとき、

「いやーそれがお嬢さんのレアスキル？ なかなか面白い能力だな」

ネリアルが飄々とした態度で待ち構えていた。何でここにいる？ 疑問とともに足を止めて透明化を解いてしまう。どうしてかは知らないが透明化が破られたとしたら使える特典は【空を飛ぶ程度の能力】と【人形を操る程度の能力】だけ。空を飛ぶ程度の能力ではこの場に置いてなんの意味もなさない。唯一戦闘できる人形を操る程度の能力もこの場に人形が無いために使うことが出来ない。本当ならこの日のために人形数体をケースに入れて用意していたのだが織主真に「移動の邪魔になるだろう」と思って置いてきた」と笑顔でわけのわからないことを言われたために無駄になった。リインフォースに胸を借りて涙を流したのは記憶に新しい。

どうにか頭に残った理性を総動員して考えてみたがネリアルには勝てないと判断、降参の意を示すために両手を挙げてバリアジャケットを解除する。

「いくつか質問して良い？」

「どうぞどうぞ、子供の疑問に答えるのも大人の仕事だ」

「どうしてボクの透明化がわかったの？ どうしてこの場所に先回りで

きたの？それに……どつやって気配も感じさせずにボクの背後に回り込めたの？」

「まず二つ目、お前自身を透明化できたところで足跡まで消せる訳じゃない、地面に残ってた足跡を辿らせてもらった。そして二つ目、お前が放った監視用のスフィアの二つをハッキングして俺の支配下に置いた、それでお前のことを逆に監視してた訳だ。最後の三つ目は」

そう言つとネリアルの姿が彩瀬の前から消えた。いや、消えたように感じただけだ。さっきまであったネリアルの気配が一気に消えたためにいなくなったような錯覚にとらわれている。

「どつやって俺は気配を消すことができる。気配が無いのに気配を探知できる訳がないだろ？これ便利よ。追跡の任務なんかで普通に対象者の隣に立つても張れないし」

「……まるで暗殺者<sup>アサシン</sup>みたいだね」

「間違つてない、これは元々は百貌と謳われた暗殺者のスキルだからな」

「……ということは貴方も転生者なの？」

「あなたも？ということはお前もなのか？」

薄々感づいていたが彩瀬はその返答で確信した、彼ネリアル・ミッドも自分達と同じ転生者であると。恐らく地上ではない別の世界に生まれたから出会うことが無かっただけなのだろう。織主と比べたら数億倍はまともそうなネリアルを見て彩瀬は安心した。

「ねえ、」の模擬戦が終わったら色々と話がしたいんだけど

「いいよ、俺も同じ境遇のやつがどんなやつか知りたいし」

最初にあつたときの棒読みではなく、ちゃんと感情の籠った声で返されて彩瀬は笑いながらリタイアを宣言する。恐らくこの後で色々

と言われるだろうがそのことを含めた愚痴をネリアルに聞いてもらおうと心の中で考えながら彩瀬は転移されていった。

彩瀬文、降参

## 模擬戦・伍

彩瀬文の脱落「……」といっても自分からリタイアをしたのが「……」は地球魔導師たちにさらなる混乱を与えた。彩瀬は直接的な戦闘力は無い、しかしクロノも唸るようなバインド魔法にシヤマルには届かないが優れた精度の治癒魔法とサポート役に徹するならばかなり優秀な魔導師であった。だから織主真はかなり強引に彩瀬を今回の模擬戦に誘い込んだ。しかしその結果が四対三、数の上でも戦力の上でも地球魔導師たちは地上魔導師たちに負けていた。

「オラクソガキが!!腑抜けてんじゃねえぞ!!」  
「があっ!!」

激昂したゼストからのラッシュを捌く織主。しかし捌くと言っても歴然のベルカの騎士たるゼストの攻撃を才能にかまけた魔導師が受けきれぬ訳がない。最初に打ち合わせた時とは違うただ棒っ切れを振り回すだけの攻撃、だがそれゆえに力強い連撃を前に織主の防御はすべて碎かれる。

「マジかよ!!ゼストってもっと冷静なキャラじゃなかったのかよ!!」

「死ねえ!!」

「死んでたまるかよ!!」

ゼストからの一撃を全身全霊を込めて受け、なんとか競り合う形にまで持ち込む。そして剣を槍に沿って滑らせた。狙うは槍を持つ手、槍には剣のように鍔を付けられていないために守られていない手を切りつけて槍を落とすつもりだった。

だが織主の浅知恵は届かず。手に当たると確信したときには手どころかゼストの姿は消え、織主の前にあるのは槍だけだった。思考が追いつかずに硬直すると織主は離れたビルの壁に叩きつけられた、遅れて感じるのは頭部に残る鈍い鈍痛。ゼストがしたことは手が狙われると感じた瞬間に槍から手を放し織主の側面に回り込んで即頭部を殴り付けたただけだ。槍のメリットはリーチの長さ、デメリットは潜り込まれた時に対処出来ないこと。そんなことなどゼストは身を持って知っていた、だからクイントに頭を下げて無手の武術の鍛練も積んでいた。

「温い、温いぞクソガキが!!その場しのぎの浅知恵が通じると思っているのか!!」

「ゼスト、少し落ち着きなさい」

槍を拾い上げ織主に近づくゼストの隣に現れたのは八神はやて撃破の功績をあげたクイント。付き合いの長い冷静沈着なはずのゼストが激昂している様子から織主がゼストの琴線に触れる何かをしたことを察知してこの場に現れたのだ。

「貴方はあの白いバリアジャケットの娘と戦ってきなさい、この子は私がやるから」

「ああ!?何言ってるんだ、お前があのガキとやれば良いじゃねえか」

「.....」

「.....」

「.....」

互いの言葉が何かに触れたのかメンチを切りあうゼストとクイント、額が着きそつなほどに顔を近づけあうがそこには色気は無く下手をすれば殺し会いに発展しそつな雰囲気だった。

「だいたいテメエはもう一人落としてんだろぅが、ならここは俺に譲れ!!」

「ただワンパン殴っただけで満足出来るわけ無いでしょうが!!だからあれは私に譲りなさい!!まだ殴り足りないのよ!!」

「.....」

「.....」

「オラぁ!!!」

何を考えたのかゼストは槍を振るい、クイントは拳を振る。槍と拳がぶつかった衝撃で大気が震えた。

「邪魔だぁぁぁぁ!!!」

どうやらお互い目の前の相手を倒してから織主の相手をすると決めたようで二人は織主そっちのけで戦い始めた。

「隊長もクイントも何をやってるのよ.....」

ビルの屋上で呆れながらゼストとクイントの戦いを見下ろしているのは地上魔導師の一人メガーヌ。ゼストの部下でありクイントの親友であるメガーヌはあぁなった二人は大抵のことでは止まらないことを経験から知っていたので放置することに決める。となれば残り三人.....幸いなことに一人はゼストが痛ぶっていたので実質二人なのだが.....の相手をメガーヌが相手をしなければならな

くなつた。本来ならネリアルを頭数に入りたいところだがネリアル  
の戦闘スタイルは相手の隙を伺い奇襲をかける暗殺者のような物、加  
えてどこにいるのかわからないとなるとネリアルへの助けは期待でき  
なかつた。取り合えず高町なのは相手にはメガーヌの召喚獣であ  
るガリユールを当てている。となるとどうしても一人だけフリーに  
なってしまう人間がいる。

「見つけました。貴女があのお召喚獣を使役している術者ですね」

金髪のツインテールを靡かせた美少女がメガーヌの前に現れる。  
容姿だけ見れば天使のようだが黒を基調とした格好と手にし  
ている鎌の形体をしたデバイスを見れば死神のようにも見えてしま  
う。彼女の名はフェイト・T・ハラオウン、大魔導師プレシア・テス  
タロツサの娘のクローンにしてハラオウン家の養子。事前に得た情  
報からフェイトが高速機動型の近接戦主体の魔導師であることは割  
れている。召喚師であるメガーヌとの相性は最悪とも言っている相  
手だがここで自分がいなくなれば戦線が崩壊してしまうことを理解  
していたメガーヌは引くことを選んだ。

「止めを」

即座に人間の赤ん坊サイズの羽虫を数十体呼び出して壁にして飛  
び降りるためにビル縁へと向かう、無論フェイトのことを視界に収  
めたままだ。一瞬たりとも目を離さないメガーヌだったが次の瞬  
間フェイトの姿がぶれた。次にフェイトを知覚できたときにはすで  
にメガーヌの目の前で鎌を振り下ろそうとしている姿だった、しかも  
それでいて羽虫たちは一匹も倒されていない。

「なんて馬鹿げたスピードなの……彼とどっちが速いのかし  
ら」

どこか他人事のように振り下ろされる鎌を眺めるメガーヌ、このままなら鎌はメガーヌを切り裂き撃墜判定を下してしまうだろう。

しかしそうはいかない。鎌が振り下ろされるよりも速くメガーヌとフェイトの間に黒い影が割って入り鎌を弾いた。それに伴いフェイトも弾き飛ばされて空中で体制を整える。

「メガーヌさんの退場の予定はまだ無いぞフェイト・T・ハラオウン？  
勝手な真似はよしてもらおうか」  
「遅いわよネリアル」

メガーヌが知るなかで最速の機動力を持つ男、ネリアル・ミッドが足を振り上げた体制のまま地球魔導師最速のフェイトの前に立ち塞がった。



## 模擬戦・祿

「おーおド派手にガンガンやりあっちゃってるよ、ゼストさんもクイントさんもバツカじゃねえの？まあゼストさんは多分相手が要らないこと言ってるぶちギレて、クイントさんは殴り足りなくて言った具合かね、クイントさんとはともかくゼストさんの理由はわからないでもないから止められないんだけどさー」

ネリアルの乱入によって空中に飛ばされていたフェイトは屋上に足をつけてと対峙していた。といってもネリアルはフェイトに背を向けて下で行われているゼストVSクイントのバトルを鑑賞している。メガー又はネリアルに一言だけ礼を言っと屋上から立ち去ってしまった。隠匿が行われているらしくフェイトはメガー又の追跡が行えない、となると必然的に相手になるのはこの場に残っているネリアルだけだった。

「囑託魔導師のネリアル・ミッドさんですね」

「イエス!!そちらは今をときめく地球出身の魔導師のフェイト・T・ハラウンちゃんだね?まあ八神はやてちゃんとリインフォース・アインスに彩瀬文ちゃんが落ちて、高町なのはは空の上、織主真はゼストさんとクイントさんのバトルの景品になってるから必然的に残ってるのは君だけなんだけどねー」

フェイトの問いかけに返事をしながらもネリアルはゼストVSクイントのバトルから目を反らそうとしない。このネリアルの行動にフェイトは逆に攻め込めないでいた。今まで戦ってきた相手は対峙するだけで強い相手だと分かった、身近な例で上げるなら闇の書事件で初めてであったシグナムがそうだ。地上魔導師たちとの顔合わせ

をした際にも誰もが強いと肌で感じて分かった。しかしネリアルだけは違った。よくわからないのだ。強いと感じるわけでもなく弱いと感じるわけでもない、その飄々とした態度ですべてを受け流す、まるでそこにいるのにそこにいないようにフェイトは感じた。

「まーもうちっと二人のガチンコバトル見てたかったけど敵さんがいるならしゃーなーかー」

ビルに残されていた手摺に乗せていた体を起こして180度ターン、それだけでネリアルはフェイトと向かい合う形になる。まず目に着くのは足に装備された鋭いスパイクと黒いロングコート。コートは十中八九バリアジャケツトだろう、するとあのスパイクは消去法でデバイスとなる。手には何も持っておらず無手、ここから考えられる行動を並列思考の中で想定する。

「首貰いつ!!」

「っ!?!」

人間として自然な行動である瞬き、それをした次の瞬間にネリアルはフェイトの隣にまで移動し腕を鎌のように振るうーいわゆるリアットでフェイトの首に打撃を仕掛けてきた。反射的に鎌を腕と首の間に差し込み直撃を防ぐ。防がれたネリアルは離れると思われたがそのままの状態からフェイトの後頭部に向けて膝蹴りを放つ。障壁は間に合わないと判断したフェイトは地面を蹴り空中へと逃げる。空中で息を整えながらフェイトはネリアルのスピードの速さに驚いていた。瞬きをした一瞬の隙をつき接近、そこからさらに防御されても相手の急所を躊躇なく狙う判断力、間違いない自分以上に戦い慣れている。接近戦では自分の不利だと判断して屋上へ下りずに空中に大量の魔力スフィアを展開した。

「フォトンランサー!!」

『Fire』

屋上に降り注ぐ大量の魔力スフィア、フェイトが保持しているスキル電気変換も相まってすべてがスタンガン以上の電気を帯びている。屋上への一斉射撃に対してネリアルルの行動は、

「リリース」

『了解よ、ソロ・ブリナドーナ孤高のダンサー 展開』

「蹴り穿つ!!」

自分に向かってくる魔力スフィア、数にして120個を一息の間に蹴った。

「なっ!？」

放ったはずの魔力スフィアがすべて自分に帰ってくるという有り得ない状況に声をあげながらもフェイトは回避を選択、先程まで自分のいた場所に魔力スフィアが叩き込まれて爆発、煙が上がりフェイトの視界を塞ぐ。

「(魔力スフィアを蹴り返した!?そんなことが出来るなんて)」

「蹴り砕く!!」

「っ!？」

煙で塞がれたフェイトの耳にネリアルルの声が届く。反射的に障壁を張る、それはバリアブレイクを付属していたであろう蹴りに呆気なく砕かれさらに追撃の蹴りが腹部目掛けて放たれる。鎌の柄の部分で防ぐが弾き飛ばされて鎌がキシリと嫌な音をあげる。闇の書事件で破壊され、修繕されたフェイトのデバイスバルディッシュは以前の物に比べて頑丈な物に変わっている。それなのにネリアルルの蹴りで軋みをあげた、つまりネリアルルの蹴りにはそれだけの威力があるとい

うこと。バルディッシュへの心配をしつつもあの蹴りが当たらなかつたことに安堵していた。

「離れての硬直戦ほどつまらない物は無いぜ？観客楽しませたいなら近づいてガンガン殺り合わないと白けちまうよ」

独自の理論を口にしながらも空中にいるフェイトと同じ視線に立つネリアル。事前の情報では地上魔導師たちには飛行魔法に対する適性がなかったはずなのにと動揺する。

「どうして飛べるのかって顔してるな？これはクイントさんのウィングロードと同じ様なもんだよ、空中にある残留魔力を集束して足場にして立ってるだけだ」

「なのはと・・・私の友達と同じスキルを持つてるんですね」

「まあ俺は高町なのはのように砲撃なんて出来はしないけどな」

自虐気味に笑いながらネリアルはフェイトの疑問に答えた。

「俺はお前たちが羨ましくてしょうがないよ。地球なんていう魔法の文化の一切無い世界に生まれたくせして桁外れの魔力を持って空を我が物顔で飛び回ってるお前たちが羨ましくてしょうがない。空を飛べない俺たち地上の魔導師をお前たち空の魔導師たちが見下しながら飛んでいるのを知っている。ああ、確かに人間誰もが鳥のように飛んでみたいと願うものだ。それを夢見て管理局の門を叩き適性が無いことを理由にその夢を諦めさせられるなんてのはよくある話だね」

けど、と言葉を区切りネリアルはフェイトを睨む。それは恨み、妬み、怒り、憤り、負の感情が込められた物だった。その視線に思わずフェイトは反論することを忘れて目を反らしてしまふ。

「けどなあ、魔導師連中の中で誰よりも地上の平和を守りたいと願っているのは俺たち地上の魔導師たちだ!!海の連中のように他の世界に行つてうつつを抜かすこともねえ!!空の連中のように上から見下ろすようなことをしねえ!!同じ視線に立って困ってる奴に話しかけて、誰よりもこのミッドチルダの世界に住む住民たちを守りたいと思つている!!空の魔導師に憧れるのはわかる!!海に出てみたいと願うのもわかる!!でも俺たち地上魔導師にだつて意地がある!!自分を犠牲にしてもミッドチルダを守りたいっていう意地がなあ!!さあ!!フェイト・T・ハラウン!!地上<sup>おれ</sup>の意地が間違つてゐるつていうのなら反論してみるよ!!」

ネリアルの心からの声にフェイトはバルディッシュを落としそうになつていた。事前に話されていた内容ではこれは親善試合のような物と聞いていたが地上魔導師からすればこれは地上の威信をどうしかして守ろうとする、決死の覚悟の試合なのだろう。出された提案に乗せられて流れてしまった自分とは違つ、自らの意思でこの模擬戦に参加したネリアルを見てようやくそれを察した。ああ、バリアジャケットを解いてバルディッシュを待機形体に戻して降参をしてしまいたい。

「(でも)」

それでも、フェイトは折れない。ネリアルに意地があるようにフェイトにだつて意地がある。友達の高町なのはや八神はやてに彩瀬文の為に、思い人たる織主真の為に、過去に亡くした娘を取り戻そうとクローンという禁忌を犯して母に作られた自分を家族と受け入れてくれたハラウン家の皆の為に。

「・・・バルディッシュ」

『Ballirire jacket purrg』

「へえ」



くぐもった声をあげながら地上に墜落するネリアル。ここを逃す手はない、そう判断したフェイトはバルディッシュを鎌の状態から大剣へと変型させ必殺の一撃を放つ。

「雷神一閃!! プラズマザンバー!!」

振り下ろされる大剣から放たれる金色の剣撃、それはネリアルを飲み込もうと雷の如く降り注ぐ。

「リリース!! ここ一番の盛り上がりどころだぞ!!」

『テンポを上げなさい、肉体強化プログラム【許されぬヒラリオン】』

「OK!! Let's show time!!」

向かい来る剣撃に臆するどころか過剰なまでの興奮を見せてネリアルは空を蹴り剣撃に突進する。そして剣撃を紙一重にかわしてさらに その剣撃の上を走ってみせた。

「そんな!」

魔力でできた剣撃の上を走ってみせるといふ離れ業を見せつけられネリアルは近づいてくるがそれを避ける手段は今のフェイトには無い。プラズマザンバーの制御に手一杯だからだ。

「行くぞ!!」

プラズマザンバーの放出が終わると同時にネリアルはフェイトに蹴りを放った。重く鋭い一撃にフェイトは蹴られた部分が千切れてしまったのではないかと錯覚してしまうほどだった。しかしまだ動ける、この後に反撃をすれば――

「行くぞ!!」





意識を失う傍らでそんなことを思いながら。

フェイト・Ｔ・ハラオウン戦闘不能

「さて、あと残すは高町なのはと織主真か」

地球魔導師たちは八神はやて、リインフォース・アインス、彩瀬文、そしてフェイト・Ｔ・ハラオウンの四人が脱落。対する地上魔導師はティータ・ランスター一人の脱落。数の上でのアドバンテージが取れていてこの状況は非常に美味しいものだと言えた。このままでいくならゼストかクイントが織主を倒し、ネリアルかメガーヌがなのはを倒せば模擬戦は地上魔導師の勝利となる。

『油断はいけないわよ、上をご覧なさい』  
「……………ファ!?!」

リリスの言葉に変な声を出してしまったネリアルはおかしくはない。なぜならばリリスが指示した上、正確に言うなら模擬戦におけるリングアウトギリギリの部分に巨大なピンク色の魔力が集束されていたのだから。

## 模擬戦・漆

「どけえ!!クイント!!」

「隊長が引きなさい!!」

ネリアルがフェイトを倒したとき、ゼストとクイントの二人は未だにバトルを続けていた。ゼストは闇雲に槍を振るい、クイントは大振りに振りかぶった拳でこれに対応する。もはや戦闘というよりもケンカに近いものになっていた。

「お前にはゲンヤがいるのだから夜に裸の組合でもして打ち負かしている!!」

「もちろんしてもらおうわよ!!でも最終的に負けるのは私だけどね!!」

「知るかそんなことおおおお!!」

「テメエラいい加減にしやがれや!!」

「へぶしっ!?!」

ナガシマ家の夜の営みがクイントの口から暴かれたその時になってようやくネリアルが二人の仲介に入った。といっても横合いから思いつきりのドロップキックを二人の顔面に放つというかなり体育会系なノリでの仲介だったが。

ちなみにこの模擬戦が放送されている同時刻、非番だったこともあり二人いる娘の一人のスバル・ナガシマと模擬戦を見ていたゲンヤはスバルから「裸の組合いつてなあに?」という純粋な疑問に答えられずにいたそう。

「バツカじゃねえの!?お前らバツカじゃねえの!?ケンカすんのは良い

けど時と場合を考えてやれよ!!」

「……ん、すまなかった」

「……ごめんなさい」

ドロップキック＋普段と違うネリアルという言葉使用によようやく冷静になったゼストとクイントは素直に謝罪した。

「ん、まずは状況確認だ。地球魔導師たちは残り高町なのはと織主真の二人、内一人の高町なのはが上空50m程から残留魔力を集束して馬鹿げた砲撃を放とうとしてる。集束されてる魔力量からして防御したところで無駄、加えて広範囲に俺たちを撃墜出来るほどの威力があると推定できる。つまりあれをどうにかしないと俺たちの負け、オーケー?」

「オーケー」

「了解した」

説明にかかった時間は30秒も無かったがそれでも魔力の集束は目でわかるほどに進められている。

「クイントさん、ウィングロードは?」

「出来ても私がいる地点から20mといったところ、それに魔力が片っ端から集束されてるから発動時間も距離も短くなっているわ」

「メガーヌ、そっちはどうだ?」

『フィールドのギリギリの所にいるけどこの距離でもダメそうね、白天王を壁にしたら残れないことも無いかもしれないけど機嫌悪くされたらこれから厄介だから却下で』

「……いけないこともない、か?」

メガーヌからの念話を聞き絶望一色になりかけていた地上魔導師たちだったがネリアルの一言に反応した。ネリアルの口調は確定的ではないといった物だったが、その反面表情は大人にイタズラを仕掛

けよつとしている子供のよつにイキキとしたものだった。

「なあ皆、分の悪い賭けは嫌いか？」

どこからどう見ても悪人面としか見えない表情でネリアルは地上魔導師たちに尋ねる。

「『分の悪い賭けは嫌いじゃない』」

それにたいしてゼスト、クイント、メガーヌの三人はネリアルと同じ様にイキキとした表情で応えた。メガーヌに至っては念話越しな筈なのに弾んだ声で大体の予想がついてしまふ。そんな彼らを見ながら満足げに頷いたネリアルは作戦とも言えない提案を出した。

「チャンスは一度きり!!しくるなよ!!」

「そちらもな!!」

「ウイングロード!!」

クイントが青い道を作り上げるが構成が緩くなっている上に距離が短い。それでも今のネリアルには十分な距離。青い道を一気に駆け抜けて最高部から跳躍、青い道の約10mにプラスしてネリアルの跳躍で約10m、五分の二程の高さに到達したがそれでも届かない。

「白天王!!」

そこに入ってくるのはメガーヌの召喚獣によるサポート。何もなかった場所から獣の腕が現れ、それを足場にさらに10mの跳躍を成功させる。しかしそれでも30m、高町なのはがいる場所には20m届かない。

「これが私の全力全開!!」

こうしている内になのはの砲撃の準備が整ってしまったようだ。杖の形態をしたデバイスが振りかぶられる。

「スターライト………ブレイカアアアアア!!!!」

放たれるのはピンク色の砲撃、空一面がピンク色で染められているこの光景は下手をすればトラウマになってもおかしくはない状況だった。それに対してネリアルがしたのは笑うこと。別に何もおかしいことではない。誰だって考え通りに物事が運んでしまえば笑みの一つも浮かべたくなってしまう。

「後は任したぞ」

「無論だ」

「任せなさい」

ネリアルの背後から続いていたゼストとクイントがネリアルの足に乗る。これがネリアルの計画。途中まで自分が距離を稼いでそこから自分が二人のために足場になるというもの。この作戦上、どうしてもネリアルとメガーヌの犠牲は必要で、ネリアルは自分が出した作戦だったということに覚悟していたがメガーヌは笑って許してくれた。

『私は母親よ？』のくらいの砲撃耐えられないと』

理論はいまいちわからないがメガーンの後押しもありこの作戦を決行、ネリアルは足に二人が乗ったことを確認して射線から離れた位置の上空めがけて思いっきり二人を蹴り飛ばした。無事に射線から離れた位置に二人を飛ばせたことを確認したネリアルは、

「後は任せましたよ、ゼストさん、クイントさん」

そう言って砲撃に飲み込まれた。

ネリアル・ミッド戦闘不能

「ウィングロード!!」

ネリアルによって運ばれた上空でクイントが青い道を展開する。ネリアルの蹴りで運ばれた距離は約15m、残りは5m程だったがここまで来れば後はどうにでもなる。なのはを挟むように展開された二つの青い道をゼストとクイントは駆け抜ける。ネリアルが決死の覚悟で運んでくれたのだ、これで決めなければネリアルに会わせる顔がない。

「クイントお!!」

「了解!!」

クイントの手につけられたナックルから薬莖が弾き出される。なのは動けない、必殺の一撃の反動を制御することに手一杯だから。

「一撃！塵！殺！」

事前に知らされていたデータからなのはの防御力が高いことは知っている。故に放つのは如何なる守りだろうと確実に通す絶対の一撃。

「デッドリボルバァァァァ!!!!」

クイントの一撃がなのはの腹部に突き刺さる。そしてなのは今までに感じたことのない程のダメージを通された。この一撃は地球にある武術でいうところの鎧通し、中国拳法なら八剋の打撃。どのような鎧で身を固めていようがその守りを貫いて人体にダメージを与える。クイントの打撃によって弾き飛ばされたなのはの先に待っているのは地上部隊隊長のゼストだった。

「突き穿つ!!」

ベルカ式のデバイス特有のロードカートリッジシステムによって強化されたゼストが放つ全力の刺突。その一撃は飛ばされてくるなのはの左胸の部分、人体の急所である心臓を的確に突き、バリアジャケットを貫通して必殺のダメージを与えることに成功した。そしてなのはは撃墜判定が下され、さらに地上に残されていた織主真もなのはの砲撃をまともに受けて強制的に転移された。

つまりは地球魔導師の全滅、ここに地上魔導師たちの勝利が確定したのだ。

模擬戰終了、勝者地上魔導師部隊



模擬戦終了〜親切はありがたいけど度が過ぎるとそれは迷惑でしかない〜

「……………勝ったけど暇だな〜」

『そうね、ゼストとクイントを逃がすために砲撃に突っ込まなければ暇じゃ無かったのでしょうけどね』

「怒ってるか？」

『別に怒ってはいないわ、ただ呆れてるだけ』

「さいですかい」

模擬戦は無事に終わり、結果は望んでいた通りに地上魔導師の勝利となったが俺は暇をもて余していた。というのも俺は今病院の一室にいるからだ。理由は高町なのはが放ったあの砲撃、本来なら撃墜判定が下された時点で転移されるはずだったのだが馬鹿げた威力のあの砲撃のせいで転移術式の一部が破損し、俺は転移されなかった。つまり上空約30mの高さで気絶した俺はそのまま落下、フェイト・T・ハラオウンの時に使っていた【許されぬヒラリオン】の効果が無ければ今ごろは地面を彩る愉快なオブジェになっていたのかもしれない。まあ生きているといってもそれだけの高さから落下したので当然のごとく無傷とはいかず背中を打撲、あばら骨数本にヒビ、加えて軽い筋肉痛になっていた。起きたときに医者から魔法による治療を進められたが俺はこれを拒否した。魔法による回復は細胞を刺激して回復を促すもの、そうすれば細胞の分裂回数だかなんだかは決まっているので大小の差があれど寿命は縮む。それならゆっくりと自然に治す方がいいのだ。まあ緊急事態なら即座に回復できる方を選ぶけど。

「入るぞ」

「よう、じいさん」

「怪我をしたと聞いていたのだが元気そうだな」

「まあ軽い方だしね、様子見で一日入院したら帰るつもりだよ」

病室のドアがノックされ入ってきたのはレジアスのじいさん、手には見舞いの品であるう果物と酒瓶、それに本が数冊あった。

「よくやってくれたな、それにすまなかった」

「じいさんが謝る必要はないよ、これは俺がへまして負った怪我だし。その果物もらって良い？」

「ああ、クイントからの見舞いの品だ。この酒はゼストからで本はメガーヌからだ。あとティーダからこれを渡してくれと頼まれていたが」

「ん？なんだこれ？」

じいさんからティーダからの物を手渡される、見たところは大きめだが普通の封筒の様だ。開封して中身を取り出すと……際どい格好をした女性が表紙を飾っている雑誌が入っていた。うん、これエロ本だね。

「じいさん」

「わかっている、ティーダの給料は50%カットしておこう」

じいさんは俺の手からエロ本を奪い取り、空中にモニターの出して何やら操作を始めた……おい、然り気無く懐にいれようとしてるんじゃないねえよ。

「あの後はどうなったの？」

「ゼストとクイントは反省文を書かせた上で一ヶ月の謹慎処分にしておいた。といってもゼストのキレた理由が理由だからな、ゼストにはゆっくりしてるように伝えてある、これから地上の勝利祝いに二人で

飲みに行く予定だ。だがクイントは駄目だがな」

「殴りたいからって理由は流石に駄目だよな、メガーヌさんとティーダは？」

「メガーヌには二週間の有休とボーナスを渡してある。ティーダにも同じようにしようと思ったが・・・」

「まあ許してやったら？50%カットしてるんだし」

「それもそうだな」

そこからしばらく雑談タイム、あの模擬戦を見てか地上部隊に入隊希望者が増えたと喜んでるじいさんを見て俺も少しばかり嬉しくなった。

「む、こんな時間か。そろそろ帰るとしよう」

「へい」

「・・・ありがとくなリアル、こんな老いぼれの戯言に付き合ってくれて」

「良いんだよ、前にも言ったけどじいさんの夢は俺の夢だ。自分の夢を叶えるためならどんな苦労だっていとわな物だったの」

「ふっ、二十も生きていない若僧が何をいうか」

俺の返事に楽しそうに笑ってじいさんは病室から出ていった。やっぱりじいさんはいい人だよ、こんな俺なんかに目をかけてくれてさ、ホント返しきれない程の恩を感じるよ。

そんな感傷に浸りながらしんみりしているとドアがノックされた。どうぞと返事をするが入ってきたのは模擬戦で戦った八神はやて、リインフォース・アインス、綾瀬文、フェイト・T・ハラオウン、黒髪の青年、黄緑色の髪の女性、そして女性の影に隠れるように立っている高町なのはだった。っーか数が多い、病室は個室とはいえそんなに広くないんだから大人数で入ってこられてもこっちが困るっての。

「はじめまして、ネリアル・ミッドさん。私はアースラの艦長のリンティ・ハラウンと申します」

「執務官のクロノ・ハラウンだ。今回はこちらの不手際のせいで怪我を負わせてしまったてすまなかった」

「う、うめんなさい!!」

まさかの海のビッグゲーム二人組の登場ですか。そんな二人が頭を下げているのに許さなければこちらの器量が疑われる。もしこれを狙ってこの二人を連れてきたなら高町は相当黒いな。

「まあこの入院費と慰謝料払ってくれるなら文句は言いませんよ、こっちの判断ミスでもありますし」

「そう言ってもらえるなら幸いです。ところでネリアルさん、うちの艦にこないかしら?」

「失せろ」

リンティがふざけたことを言い終わるか否かの時に見舞いの品として送られていたミカンを顔面に向けて投げつける。しかしそれは咄嗟に間に入って来たクロノに受け止められてしまった。

「何をするんだ!!」

「何をするんだはこっちの台詞だ。何がうちの艦にこないかだあ?ふざけてんじゃねえぞ、誰がミッドチルダを見捨てて別の世界に行くやつに隊になんて行くかよ!!見舞いに来た程度なら良いがスカウトならお断りだ!!さっさとその砲撃魔連れて帰りな!!」

何か騒いでいた砲撃魔だったが俺の機嫌を損ねたことで表紙を暗くしたリンティに連れられて病室を後にした、その際にクロノから睨まれたが無視する。そうして病室に残ったのは八神はやて、リインフォース・アインス、綾瀬文、フェイト・T・ハラウンの四人だった。うん、病室の大きさならこの人数がちょうどいいな。見舞いの品

の酒瓶の蓋を開けてグラスに注がずに直接飲む。あ、旨い。

「悪かったな、急に怒鳴ったりして」

「いえいえ、あれはどう見てもリンティさんが悪いですよ」

「うん、流石にあれは酷いと思う」

「同感だな」

「確かに行きなり来てスカウトはないわな」

上から順に綾瀬文、フェイト・T・ハラオウン、リインフォース・アインス、八神はやてである。怒鳴ったから気分悪くしち思ったけどそうでもないようだ。

「ところで怪我の具合はどうですか？」

「打撲と骨にヒビと筋肉痛、医者いわく過度の運動しなければ完治に一ヶ月程度だとき。ちなみに明日退院予定」

「早いな、もう少しゆっくりとした方がいいんじゃないのか？」

「こっちにも都合があるんだよ。それにこんなところはずっといたら暇と退屈で死んでしまっわ」

「それにしても落ちて負傷とか間抜けやな」

「は、はやて!!」

「クイントさんのワンパンで沈んだやつに言われたくないよ、俺だつてあれ食らったことがあるけどまだ動けてたぞ」

そんな調子で俺たちは談笑を楽しんでいた。綾瀬と八神がハラオウンを弄っているのを見て二人と一緒にになって笑ったり、念話越しに綾瀬の織主に対する愚直を聞いたり。ただ八神が真剣な表情で俺に胸を大きくするにはどうしたらいいか聞いてきた時には見舞いの品のメロンをぶつけて豊凶手術でもしろと言っておいた。

「いったゝ容赦無い突っ込みやな」

「目がマジなんだよお前は」

「あ、もうこんな時間。そろそろ帰らないと」

「そうだね」

「では我々は失礼するでしょう。お大事に」

「見舞いありがとうね」

適当に手を振りながら四人を見送り、扉が閉められると同時に脇腹を押さえる。

「……………っ!!」

『麻酔が切れた見たいね』

「チクシヨウ…弄られてるハラオウンが面白すぎて笑いすぎた…」

『馬鹿ね』

「はいはい…にしても、やっぱりというかレヴィとは全然似てなかったな」

『そうね、こっそり身体サーチかけてみたけどレヴィの方がスタイルが良かったわよ』

「要らん情報ありがとうさん」

ホントにいらぬ情報だよと思いつつながらナスコールに手を伸ばそうとするが、地響きを感じて手を止める。なんだ？地震か？

「……………ネリアルウウウウ!!!」



いな。明日飯屋に連れて行ってやるから好きなもの好きなだけ食べるよー」

『ぐずん……うん!!』

やっと泣き止んだか、飯に吊られて泣き止むとは現金な奴だな。笑顔でにぱーとなっているレヴィを押し退けてユーリが画面に映る。その顔は少し不機嫌そうな表情である。

「どうした、ユーリ？」

『……レヴィだけズルいです。私にも何かしてください』

「……考えておきます」

『はい!!』

ここは俺が折れるしかない、どうして不機嫌になっているのかわからないがここで機嫌を治しておかないと今後の生活に支障が出ると俺の第六感が告げていた。どうやらこの選択肢は正解だったようでユーリは機嫌を治してくれた。

『やぁネリアル君、死んでいないようで何よりだ』

「よう変態マッド、悪いな二人のこと任せて」

『なに、このくらいのことなら構わないよ』

今度はユーリの代わりにジェイルが画面に映った。奥でウーノさんが怪しげな小瓶の中身を混ぜ合わせているのは気のせいだと思いたい。

「とろろで送ったデータはどうだった？」

『中々興味深い物だよ!! 僅かに現存するユニゾンデバイスのコピーデータ!! これだけで一週間は不眠不休で逝ける!! ユニゾンデバイスが完成したら君にあげるつもりだよ』

「お前は本当に作ることにしか興味がないのな」



『何をいうか!!私が見つけた作品と言うことは私の子供も同然!!それを君に渡すとなればそれは嫁入り、否婿入り!!つまりネリアル君が私の義理の息子となると言うことだ!!』

「ごめんなさい、わかる言語で分かりやすく話してくれ」

『ネリアル君は私の息子!!異論は認めん!!』

「結局言いたかったのはそこなのね」

あれ?おかしいな、鎮痛剤が聞いているはずなのに頭がいたい。

「はあ・・・明日迎えに行くからそれまで二人のことは頼んだぞ」

『待ちたまえ、一週間後に何か予定はあるかね?』

「一週間後?何も無かったはずだけど?」

取り合えずあばら骨が治りきるまでは囑託魔導師の仕事も受けるつもりはない。金銭なら今回の模擬戦の報酬としてじいさんから出てるから問題ない。まあレヴィの食欲を多少抑えさせる必要があるけど。

『それなら良かった。実は家族旅行を計画していてね、それに君たちも誘いたいと思っていたのだよ』

「マジか、そいつはありがとう。で?行き先は何処なんだ?」

『ふっふっふ・・・よくぞ聞いてくれた!!行き先は第97管理外

世界

地球だよ!!  
』

「……マズいっ」

どつやら里帰り兼修羅の国への出航フラグが立ったようです。

## 修羅の國へイラッシャーイ

「管理外世界!!」

「地球に!!」

「来たあああああ!!!」

前回の模擬戦から一週間後、俺たちはジェイルに誘われて俺の元故郷であり、現修羅の國である地球にやってきたのだが……

「アッハッハッハ……寒いわボケエ!!!」

アロハシャツ姿のジェイルとウーノさんは叫んで首にぶら下げた花の首飾りを叩きつける。どうして二人がこんな行動を取ったかと言えば……外を見れば猛吹雪、どこからどう見ても地球は真冬ですね。本当にありがとうございました。

ちなみにノーヴェを代表としたジェイルの娘たち通称ナンバーズは二人の新婚旅行を邪魔したくないとの理由でお留守番しているらしい。良くできた娘さんじゃないか。

「ネエルウ〜さ〜む〜い〜よ〜」

「ガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタ」

「そりゃそんな格好してればねえ……」

レヴィは半袖シャツにホットパンツの全体的に黒っぽい格好、ユーリは白いワンピース……二人とも似合ってはいるんだが季節が悪かったな。それは春夏、我慢できても秋までの格好だ。間違っても今日みたいな猛吹雪が吹き荒れる真冬に着る服じゃない。

「どうしてネルだけそんな格好してるかと思ったらそれが理由か……!!」  
「ず、ズルいですよ……」  
「事前に情報集めなかったお前らが悪い。世界越えても季節が同じとは限らないんだぞ」

俺の格好は厚手のコートに手袋マフラー付きの完全装備である。  
情報収集って大切だよな。

「こ、コート!!コートだけでも……」  
「わ、私も……!!」  
「ったく」

手持ちのバックから子供用のジャンパーを二つ出して二人に手渡す。事前に準備しておいて正解だったようだ。ジャンパーに気がついた二人はそれを引いたくるように受け取っていそいそと着替えた。

「ありがとうございます」  
「貴方は神か……!」  
「ハッハッハ、崇めるがよい」  
「ネル大明神さまあ!!我らにも服を……!!」  
「貴様にくれてやる服などない……!!」  
「キツサマアアアア!!!」

顔を真っ青にしながら震えるジェイルを見て笑いながら気になったのでウーノさんの方を見る。するとウーノさんは寒さで震えるジェイルをほっこりとした表情で見ている……あんだ、もしかして狙ってた?

「こ、これは一刻も早く服を購入せねば!!ネル、宿泊施設はわかってい

るよな!？」

「もち、住所から交通手段まで頭の中に入っている」

「ならばここから先は自由行動だ!! ウーノ!! 服屋に向かうぞ!!」

「イエスドクター」

そう言い残してジェイルとウーノさんは残像を残しそうな勢いで駆けていった………頑張るなあ、二人共。

「ネル、僕たちはどうするの?」

「ん? とりあえずミッドで買ったガイドマップにあったお勧めの喫茶店に行ってみようかと思ってる。ここからそう離れてないはずだからそこで一息しよう」

「なんでもいいから早く暖かい所に行きたいです」

「それもそうだな」

外に出て一歩踏み出すと俺の脛のまん中辺りまで雪に埋もれた。積もりすぎたら、田舎ならともかく都市部なら交通機関が麻痺する勢いだぞ。

「うううやっぱり寒い!!」

「はいはい、これやるから。ユーリにはこっちかな?」

「え……あ、ありがとうございます」

寒さにやられて文句を言っているレヴィに俺が着けていたマフラーをかけてやり、口には出していないが寒そうに手を擦り合わせていたユーリには手袋を着けてやる。お陰で俺の寒さ耐性は下がってしまったが二人の震えが少し収まったから良しとしよう。

「んじゃ行くぞ〜はぐれるなよ〜はぐれたら死ぬぞ〜」

「はい」

「分かりました〜」

ザックザックと雪を掻き分けながら俺たちは歩き出した。

「にしても積もったな〜」

「ホントにすごいね〜」

「知識だと雪が降ったらかまくらを作ったり雪玉を投げ合ったりして遊ぶそうですよ?」

「こんな吹雪の中で!?地球はやっぱり修羅の国か……!!」

「普通だったらこんな吹雪の中で外出しねえよ。その遊びは晴れた日にするもんだ。こんな猛吹雪の中で遊びでもしたら自殺行為以外のなんでもねえよ」

「そう言えばネルってなんか雪道歩くの慣れてるけど寒いところの出身なの?」

「うんにゃ、囑託魔導師の仕事で何度か雪のある世界に行ったことがあるからそれでだろ。まあそんな中で比べれば今は楽な方だな」

「どんな世界ですかそこは……」

「まず今以上の吹雪、加えて原生物が凶暴な奴ばっか、極めつけに個人任務でサポート無し」

「それなんて無理ゲー？」

「いや、寝たら凍死、止まったら凍死だったから三日間の72時間動きっぱなしだったな。まあ家帰って寝て起きたら120時間丸々寝てたけど(笑)」

「笑い話じゃないですよ」

歩き出してから大体十分程か、黙って歩いても精神的によろしくないので適当にダベリながら歩いている。俺が先頭になって道を作りながらの風避け、レヴィとユーリがそれに続いてるって形だな。事前にマップピングしておいた地図によればこのままのペースでいけばあと5、6分ってところか？

「お、自販機発見。何か飲むか？」

「僕ココア!!」

「私はミルクティーをお願いします」

「アイアイ」

途中で自販機を見つけ、冷えた体を暖める為に飲み物を購入することにする。ココアとミルクティーを買って二人に渡し、自分用にカフェオレを買うことにする。

「あーさぶいさぶい……ん？」

購入口から買った物を取り出そうとしたとき、自販機の横に不自然な雪の塊があることに気がついた。他の場所が真っ平らなのにそこだけこんもりと盛り上がっている。ちょっとした好奇心からその雪の塊を崩してみると――

「おいおい……マジかよ!!」

雪の中から眼鏡をかけた茶髪の女性が現れた。

「こんな吹雪の中でとか洒落にならねえぞ!!」

慌てて女性を雪から掘り起こして首に手を添える。触った皮膚越しに血管からトクントクンと脈打っているのが伝わり、女性が生きていることを教えてくれた。ホッとするがすぐに思い改める。生きているがどのくらいの時間を雪の中で過ごしていたのかわからない。もしかしたら俺たちが来て然程時間が経ってないかもしれないし俺たちが来るずっと前から埋まっていたのかもしれない。どちらにせよ早く暖かい所に連れていかないと不味い。

「レヴィ!!ユーリ!!急ぐぞ!!」

着ていたコートを女性に巻き付けて少しでも暖を取れるようにしてやる。寒気でわからないが恐らく女性の体はかなり冷えているだろう。救急車を呼ぶことも考えたがそれよりも俺たちが喫茶店に運んだ方が間違いなく早いだろう。いきなり意識不明の女性を連れてこられたら向こうも焦るかもしれないがこれも人命救助の為だ、大人しく諦めてもらおう。

コートを巻き付けた女性を横抱きに抱えながら俺たちは目的の喫茶店――――――――――【みどりや翠屋】へと向かっていった。



おいでませ翠屋!!

「ん……………」

目を覚ますとそこは見慣れた私の部屋だった……………あれ?今日は確か学校に行く途中だったはずだったのに……………

「どうして?」

「やっと目を覚ましたか、美由希」

「あれ?恭ちゃん?」

そこにいたのは私の兄の恭ちゃん、いつもなら忍さんの家にいるはずなのに今日はここにいる。どうしてだろう?

「お前どこまで覚えてる?」

「学校に行く途中だったってどこまでは……………」

「どうやら道端で倒れていたらしくてな。こんな大雪だ、もしかしたら凍死していたかもしれん。運が良かったな」

「と、凍死!」

そ、そう言えば朝ちよつと風邪気味っぽかったけど……………まさか意識を失うほどになるなんて……………ん?らしい?

「恭ちゃんが助けてくれたんじゃ無かったの?」

「いいや、俺は父さんに呼ばれて来たんだ。お前を運んでくれた人は下にいる。起きれるようならお礼を言いに行くといい」

そう言って恭ちゃんは部屋から出ていった。体調を確かめるが少

し火照っている程度で動けない程に酷いわけではない。着せられていたパジャマ（恐らくお母さんが着せてくれたのだろう）の上に着る羽織つて下に降りる。するとそこには――

「へえ、これがキモノって奴か。初めて着るけど動きやすく悪くないですね」

「ネルー！見て見てー!!」

「レ、レヴィ!!帯結んでませんよ!!」

そこには紫色の髪をした男性と金髪の少女、そして妹の友達に似た容姿の青い髪の少女が家にあっただであろう着物を着て何やらはしゃいでいた。

「いやーすみませんね土郎さん、わざわざ着る物用意してもらって」「いやいや、娘を助けてもらったのにこれくらいしか出来ることななくて心苦しい限りだよ」

道端で女性を拾って目的地である翠屋に着いたら、まさか拾った女性が翠屋の店主の娘さんであることが発覚。その介抱でドタバタし

ていると雪で濡れた服のせいで体が冷えたのかレヴィとユーリがくしゃみをした。それを見ていた桃子さんから差し出されたのが何故か着物、こつして俺たち三人は着物パーティーをすることになりましたとさ。

どうやらこの翠屋は家族で経営しているらしく、紹介された土郎さんと桃子さん、そしてバイトで経営しているそう。それにしても土郎さんと桃子さんが子持ちの親に見えない。流石は修羅の國、死ぬ間際まで戦える体を維持できるということか。

「俺からも礼を言わせてもらう。ありがとう、貴方のお陰で妹が死なずにすんだ」

「あ、ありがとうございました!!」

頭を下げたのは土郎さんと桃子さんの子供の恭也(呼び捨てでいいと言われたからそうしている)、そして恭也の妹で俺の助けた女性美由希ちゃん(なんとなくちゃん付けで呼んでいる)……。どうしてだろうか、誰かに頭を下げられている光景を見ていると――

「胸が鋤くような気持ちになる……。!!」

「ネル!!物凄くいい顔してるよ!!具体的に言つとジェルに人体破壊技をかけたときみたい!!」

「ネル、ダークサイドの顔が出ていますよ」

おっと、不味い不味い。旅行気分がハメが外れていたか?

「すみません、本性が漏れてしまいました」

「本性が!?!」

「なるほど、いい顔だったな」

「うん、とてもいい顔だった」

「素敵な笑顔ね、土郎さんには及ばないけど」  
「ちよ!? 恭ちゃん!? お父さん!? お母さん!?」

「……………あの顔を見ていい顔と言われただど!」

「一つお尋ねします……………奇襲不意打ち暗殺をどう思われますか」?

「戦場における最高の行い(だな/だね/よね)」

「私は理解者に巡り会えた……………」

「皆が壊れた……………」

恐らくこの先巡り会うことの無いであろう最高の理解者に出会えたことに喜びの涙を流す俺と家族の本性を知ったことだ涙を流している美由希ちゃん……………ゆえ……………ゆえ……………

「愉悦……………っ!!」

「はぁ ネルってば今日一番の顔してるね!!」

「(あとで慰めてあげましょっ)」

そこから話が弾み、俺たちが知り合いたちと一緒に宿に泊まるころまで話した時に俺の携帯端末(地球の科学技術に合わせた物)に連絡が入っていた。相手はもちろんジェイル。

「すいません失礼……………もしもし?」

『ああ! ネリアルかい!! 私だよ私私!!』

「私だなんて知り合いはいないので」

『あーすいません!! ジェイルです!!』

「はじめっからそう言えばいいのに……………で、なんだ?」

『実は私とウーノは先に旅館に着いたんだけどね!! どうやら雪の影響で道が塞がったとかでここから出られそうに無いんだよ!!』

「アイイ!?!」

『雪が止んだら除雪機が来るって話だけどそれまでここから出ることもここにすることも出来ない!!悪いけどどこかでホテルを探してくれ!!ああちよっと待ってウーノさん!!その縄で私に何を……』  
ツーツーツー

……ジュエルはウーノさんに補食されるようです、ご冥福をお祈りします。五秒だけ祈ってから思考を切り替える。元々泊まるつもりだった宿に泊まれなくなってしまったのは痛い。これから宿を探さなくちゃいけないけどこの天気ならまともに経営しているのかどうかすら怪しい、てかそもそもこの大雪の中で歩きたくない。

「どうかしたのかい?」

「雪の影響で泊まるつもりだった宿に行けなくなったみたいで……ああ、知り合いはもう宿に入ってたみたいで大丈夫そうですけど」

「ふむ……それなら家に泊まっていくかい?」

「……良いんですか?」

見ず知らずの人間を家に泊めるなんてこちらからしたらありがたい提案だけどそっちからしたらデメリットしか無いぞ?もし俺が殺人享樂家なら間違いないこの家は血塗れになること間違いなしだ。桃子さんを除いた三人、特に土郎さんと恭也が戦闘能力の秀でた人間だということはそれぞれの立ち振舞いから分かる。だがその程度だ、そう言った手練れを無力化出来る方法は知っているしそれを行えるだけの技量を持ち合わせている。それなのに俺たちを泊めるつもりか?

「まあネリアル君の言いたいことは分かるさ。その上で言わせてもらおう、【子供に好かれる人間に自称を除いて悪人はいない】。僕の経験から言える言葉だ」

「……なるほど、参りました」

スゲーわこの人、俺のこと見て自信満々に言ってるっしょ。そんなこと言われたら従っしか無いじゃないですかー。

「では、御好意に甘えさせていただきます。二人もお礼言いなさい」

「ありがとうね!!」

「ありがとうっぺいませす」

「レヴィ……ユーリはともかくレヴィ……っ!!」

「うんっん、子供って言うのは元気が一番だからね。これくらいがちょうどいいよ」

「……すいませす」

「っして俺たちは翠屋経営者……高町士郎さんの御好意に甘えて止めてもらっっになった。

『……そう言えば高町って模擬戦で戦った高町なのと同じ名字ね』

「……偶々同じ名字なんだよ……なんじゃないかな……」

『なんだと思うな・・・多分・・・』  
『後ろに行くにつれて弱くなっているわよ』